

楽浪土城址出土の土器（下）

——楽浪土城研究その4——

谷 豊 信

1. 土器の質
2. 軟質灰色系土器 [前々号]
2. 軟質灰色系土器（承前） [前号]
2. 軟質灰色系土器（追加） [以下本号]
3. 硬質灰色系土器
4. 滑石混入土器
5. 白色土器
6. その他の土器
7. 施釉陶器
8. 土器に関する考察
 - (1)出土土器の分類と年代
 - (2)出土土器の変遷
 - (3)楽浪土器の器種と製作技法
 - (4)土城内の出土位置

2. 軟質灰色系土器（追加¹¹）

(19) 把手類（図28・図版15-1）

小型の把手の破片が6点ある。胎土はきめ細かく、やや軟質である。小型薄手の土器の一部であろうが、小片のため本来の上下、傾きはよくわからない。

図28-1～3は細長い角形の把手のようである。1は灰褐色、2は灰褐色ないし灰色、3は火を受けたのか、くすんだ赤褐色を呈する。同様の破片が計5点あり、出土地点がわかる3点はD区域の出土である。

4は褐色を帯びた灰色の橋状把手である。基部の傾きからみて、横方向についていた可能性が高いと思われる。手づくねで成形し、一部をヘラで調整している。

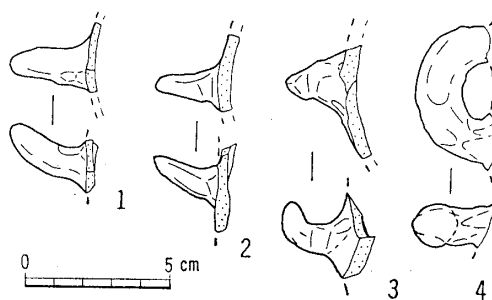


図28 楽浪土城 軟質灰色系土器
小型突起・把手（1/3）

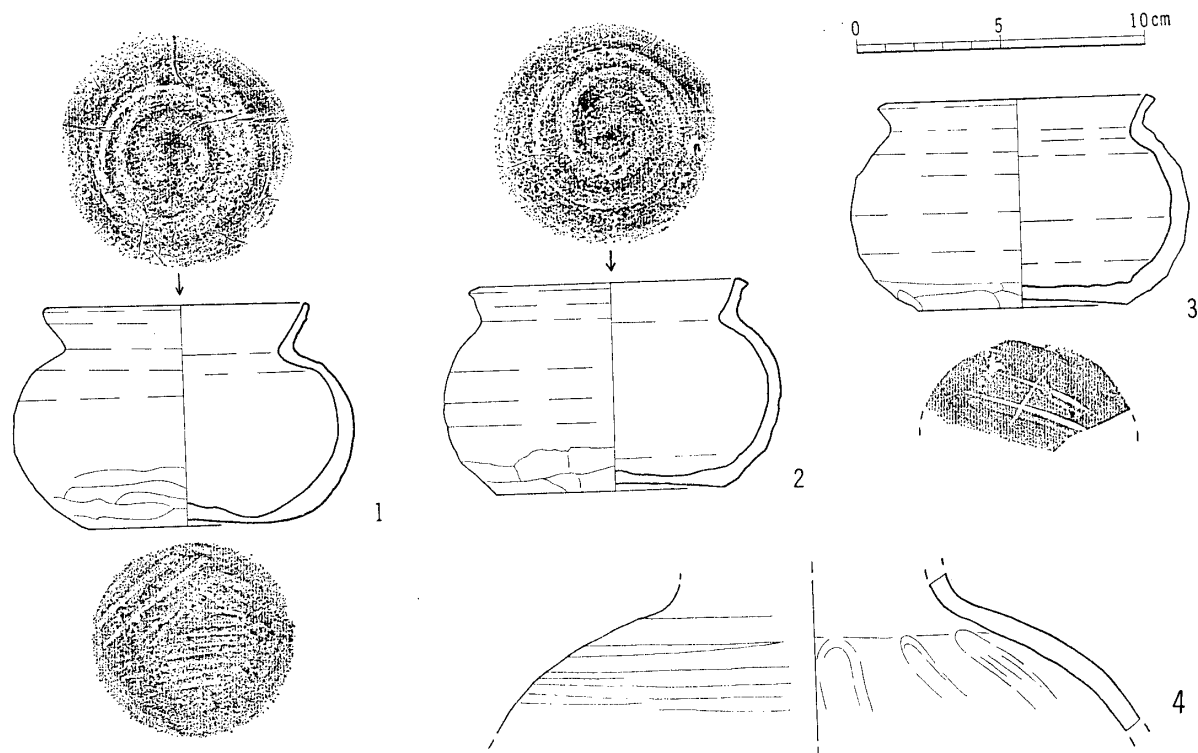


図29 楽浪土城 軟質灰色系土器 罐 (1/3)

(20) 罐 (追加) (図29-1~4)

鮮やかな赤褐色の小型罐が3点ある。赤褐色である点を除けば、胎土・製作技法ともに前述の小型罐とまったく同じである。

1は土器内面に「の」の字状の調整痕が、底面にはへら削りによるかと思われる擦痕がある。側面下半には、回転を利用しないへら削り痕がある(図版15-2)。2も1とほぼ同じであるが底部は平滑である(図版15-3)。3は破片からの復元である。底面には沈線が2本引かれている。1と2はCM区で出土、3はCM区とD¹⁻³I区出土の土器片が接合したもので、出土地点は近接している。

以上3点と同じ形式の土器は、楽浪郡地域の木槨墓から多数出土している。前稿で紹介した小型罐と同じ性格の土器であろう。こうした小型罐はほとんどが灰色であるが、この3点が赤褐色を呈するのは、たまたま酸化焼成されたか、焼成後に火を受けたためと思われる²⁾。

4は表面が黒褐色、内面が褐色を呈し、断面は表層が褐色、中心部が灰色である。胎土はきめ細かく、軟質である。外面は、頸部は横なで、肩部は横方向のへら削り痕がみられる。へら削りには、木製の篋を用い、回転を利用したと思われる。頸部内面には横なで痕がみられるが、内面肩部以下には指押さえ痕が残っている。灰色系土器としておくが、胎土や調整技法は、楽浪土城の土器としてはやや異質である。

3. 硬質灰色系土器

砂をほとんど含まない緻密な粘土を、南部朝鮮の陶質土器や日本の須恵器に匹敵する硬さに焼き

楽浪土城址出土の土器（下）

上げた灰色の土器である。器形、製作技法は軟質灰色系土器とほとんど同じであるが、一部にやや特異なものを含む。

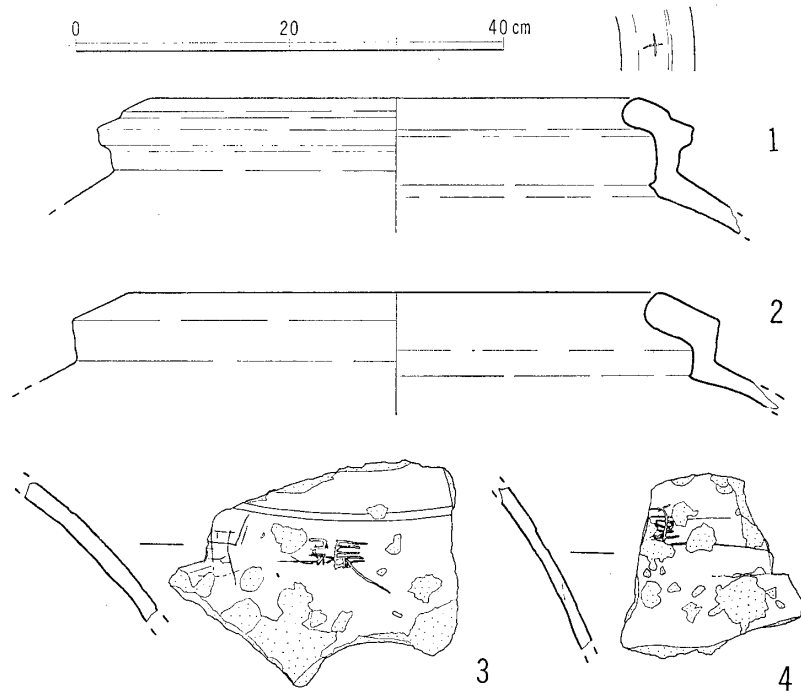


図30 楽浪土城 硬質灰色系土器 甕 (1/8)

(1) 甕 (図30)

大型の甕の口縁部破片が2点ある。形、大きさは軟質灰色系土器の甕と同じであるが、厚い器壁の中まで均等に灰色に焼き上げられ、極めて堅緻である。胴径1 m前後の大型の甕であろう。1の口縁の上面には、焼成前に「十」字形に短い沈線が引かれている。

(2) 胴部破片 (図30,

31, 図版15-8,9)

厚さ1.5~2 cmの厚手の胴部の破片が4点ある。

うち2点には縄の叩き目がみられ、別の2点には文字が刻まれている。

図30-3は厚さ2 cm前後、外面の上部に幅7 mmの浅い凹線がひかれている。外面は剥落した部分が多いが、中央に横長に「張」の文字が刻まれている。焼成後、釘のようなもので引っ掻いたようで、何度かひっかいた跡が残っている部分もある。漢隸の風があり、楽浪郡時代のもので、人名かと思われる。「張」の左に浅い細い線が不規則に引かれているが、文字ではないようである。

4は破片の上部に2本の水平方向の沈線がひかれ、上部左端に文字が刻まれている。筆画は弱く、一部は剥落している。「重」ないし「車」のようであるが、「重」の方が可能性が高いと思われる。あるいは「鍾」などの文字の傍であったのかもしれない。字体は楽浪郡時代のものとみてよいであろう。



図31 楽浪土城 硬質灰色系土器 甕の陶文 (1/3)

(3) その他 (図32, 図版15-6,7)

1は罐の肩部の破片である。内外面は灰青色，断面は赤褐色を呈する。粘土紐を叩き技法で成形しており，内面に粘土紐の継目がはっきりと残っている。外面は格子目の叩き目が見られ，その上に粗い擦痕がある。肩部から頸部に立ち上がる部分に幅5mm，高さ3mmの凸帯がめぐる。凸帯上面には幅1cmの右上がりの圧痕が約5mmの間隔を残して並んでおり，縄を貼りつけたかのように見える。わずかに残っている頸部には波状の沈線が2本引かれている。内面には格子目の当て具痕が残っている（図版15-7）。

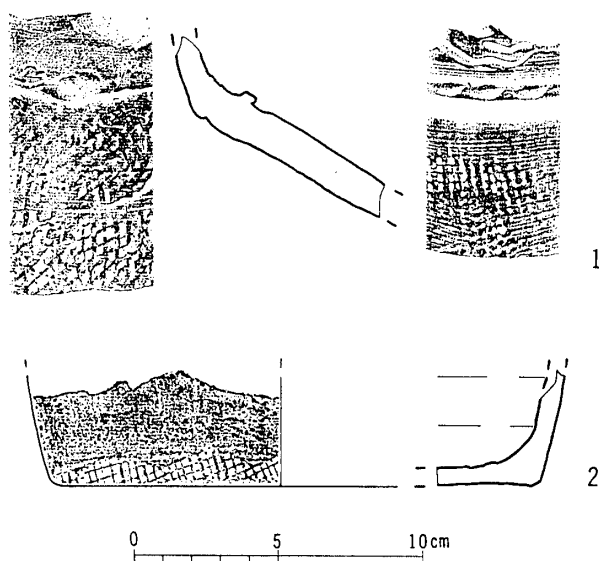


図32 楽浪土城 硬質灰色系土器 (1/3)

2は黒灰色で，外面には薄い釉のようなもの

が認められる。外面は格子の叩き目の上を横なでしており，側面下半の叩き目ははっきり残っている。内面には回転を利用したと思われる横なで痕がついている（図版15-6）。

この2点は特に堅緻で，胎土も図30，31の硬質土器とやや異なること，土器外面に格子の叩き目が認められること，釉かと思われるものも見られるなど，これまで紹介した土器とは異質である。後世の土器であろう。

4. 滑石混入土器

きめの粗い粘土に滑石の粒子をまぜた，多孔性に富んだ土器である。色調は赤褐色，暗赤褐色，灰色，灰青色などさまざま，なかには銀色を帯びたものもある。一般に焼成は均一ではなく，同一個体でも，内面と外面，表層と断面で異なった色調を呈するものが多い。表面にきめ細かい粘土と滑石の粉が薄い層をなして光沢をもつものがあり，スリップ掛けが行われた可能性も考えられる。

(1) 鼎（図33，34，図版15-12～14，16-1～4）

三足と両耳のついた鼎の完形品が1点，ほかに鼎の破片と思われる土器片が57点ある。

図33-1はC—D区域出土。この器種では唯一の完形品で，発掘直後に復元されている。耳の上端までの高さは33cm，口縁までの高さ26.5cm，口径22cm，胴部最大径35cmである。算盤玉形の胴部に，断面長方形の板状の耳と断面円形の短い脚がつく。耳には直径約1.5cmの孔が穿たれている。耳と体部の接合部分は，壁が押されてやや内側に突出している（図ではこの状態を示している。耳のない部分は胴部下半と同様の曲線を描いて口縁部にいたる）。三足のうち本来のものは1本で，2本は復元である。表面は平滑であるが，口縁部を除き，回転を利用して仕上げたものではないようである。外面は灰色ないし灰褐色，底部はやや赤味を帯びている³⁾。表層には，細かい滑石粉を

楽浪土城址出土の土器（下）

まじえたきめ細かい粘土が塗られているように見える部分があり、その箇所は光沢があり、銀色にみえる。内面は褐色である（図版16-1）。

2は耳のついた破片からの復元図である。鼎のなかでは最大のもので、復元口径は28cmである。内外面とも銀灰色である。耳は単に器壁に貼り付けられただけで、出土時には剥がれていた。外面は平滑、内面には横方向になでられている（図版15-14）。

3、4は口縁部を含む破片である。体部に耳の痕跡と思われるものがあるので小型の鼎と推定する。3は口縁径21cm、褐色で破片の端に焼成前に篋先でくりぬいたような孔の一部があり、その隣に剥げた面と「みみずばれ」状の粘土の盛り上がりがある。5のように孔に差し込まれたと見られる突出部がある耳もあることから、3はこうした耳をつけた鼎と思われる（図版15-12）。4は口径17cm、灰色で破片の肩部のかなり広い部分が剥げており、ここに耳がついていたものと思われる（図版15-13）。

鼎の耳と思われるものは9

点あり、すべて穿孔されている。5は明るい赤褐色で、横断面は平たい長方形を呈する。中央に直径

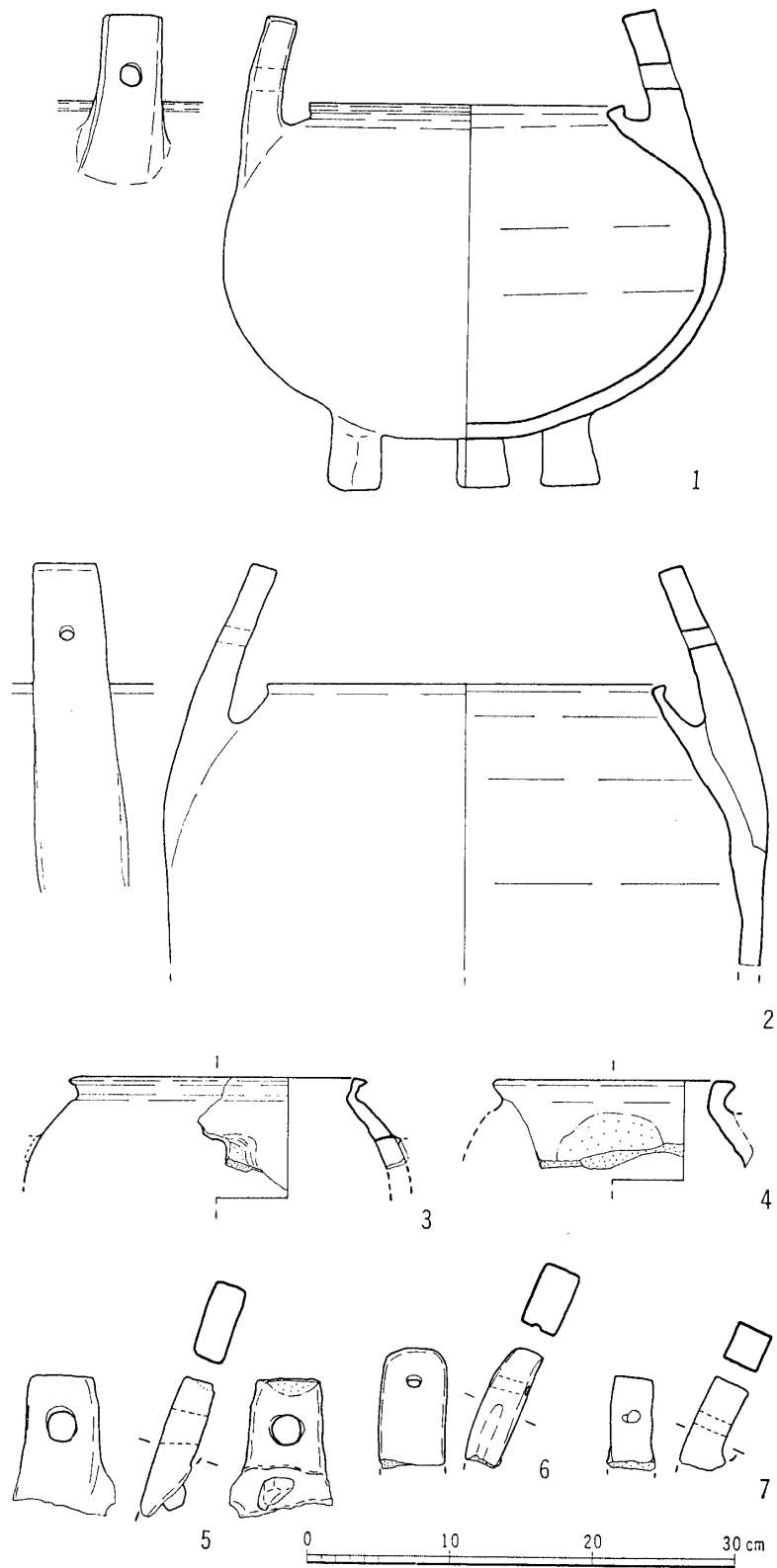


図33 楽浪土城 滑石混入土器 鼎（1/6）

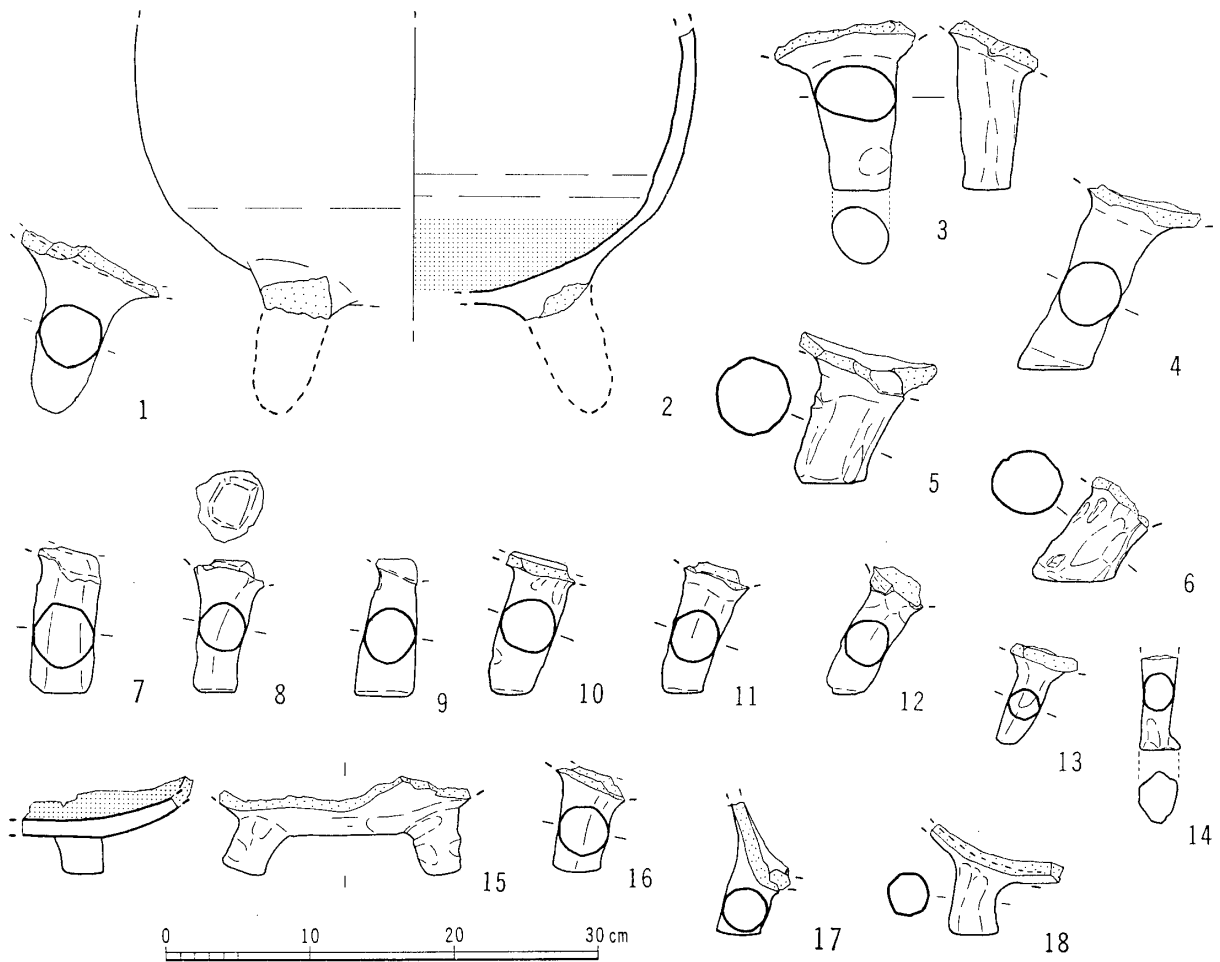


図34 楽浪土城 滑石混入土器 鼎 (1/6)

約 2 cm の孔が穿たれているが、これは鼎の耳では最大である。体部との接合部には直径約 1.5cm の突出があり、穿孔された器壁に接合されたものと推定される。この型式の耳はこれ 1 点である。6 は灰色、残存長 8.5cm であるが、本来はさらに長かったものと思われる。側面に凹線が 1 条ある。この種の、断面がやや平たい長方形を呈する長い耳がもっとも多い。7 は銀灰色、断面はほぼ正方形で、長さは短い。小型の鼎の耳と思われる (図版 16-2)。

図34-1, 2 は直接接合はしないが、胎土や形状からみて同一個体と思われるものである。ともに外面は灰色ないし褐色を呈し、内面は銀灰色、断面は灰色である。底面と脚はやや赤みがかかる。脚は断面がほぼ円形で、先端も丸い。1 の内面には細かい布目の痕跡があり、1 cm 四方当たりの糸の本数は 12~13×25 本である。2 の内面は不規則になでられているが、その下にも布目の痕跡が残っている。これもかなり細かいようであるが本数までは判別できない。

このほかに脚状の破片が 26 点ある。どのような器についていたか不明であるが、ひとまず鼎の脚としてまとめておく (図版 15-3, 4)。いずれも手づくね製である。横断面はほぼ円形であるが、隅丸の多角形状になっているものもある。15 にみるように、平らな部分が床に接していたとは限らないようであるが、他に判断の材料もないので、平らな面が床に接していたものとして作図した。

楽浪土城址出土の土器（下）

図34-3は脚部が褐色、器の内面に当たる部分が灰色の、直立するやや大型の脚である。胎土はやや粗い。断面は楕円形であるが、ねじれたようになっている。4は赤褐色で最も長い。5,6は太く短い脚である。5は脚部外面が灰色から赤褐色、器内面は黒色、断面は灰色を呈する。器の内面には細かい擦痕がついている。6は赤褐色、器内面には布目がついており、1cm四方当たり16×16本以上である。

7～12は直径3cm前後、長さ8cm前後の脚であるが、平らな面が床に接していたと考え、傾きにはかなりの幅があることになる。10の脚に残っている器の内面には布目がついているが、布目は引き伸ばされたような不規則な間隔を呈し、1cm四方当たりの糸の数は10本以下である。8,11のように器に接する部分を横断面長方形に整え、ここを器の底部に差し込んだことがわかるものもある。色調は赤褐色、褐色、灰色など様々である。

15～18は直径3cm前後、高さ4cm前後の短い脚である。15,16,18の器の内面には細かい布目が残っている。15は灰色、胎土はかなり粗い。鼎の底部に2本の脚がのこっているが、一つの脚の平らな面は床に密着しない。16は暗灰色、17は赤褐色、18は外面が赤褐色、内面・断面が灰色である。

13,14は細長く、脚ではなかったのかもしれない。13は褐色ないし灰色を呈する。14は赤褐色で胎土は粗くもろい。

小 括

ここに鼎として挙げた57点の土器は、胎土・製作技法の特徴から、おおむね楽浪郡のころのものと考えられる。

楽浪郡時代の墓からは、滑石または石綿をまぜた灰色ないし赤褐色の土器がしばしば出土している。その中には土器内面に布目が残るものが少なくない（後述）。また楽浪土城出土の漢式の雲気紋瓦当にも青灰色ないし褐色の滑石混入胎土のものがあ、その多くは丸瓦部分の内面と瓦当の背面に細かい布目が残っている（文献28）。このことから楽浪郡時代には、滑石を混ぜた粘土を、布を被せた型を利用して成形する技法が存在していたことが知られる。こうした特徴をもった土器は楽浪郡のころのものと思われる。

朝鮮半島では各時代を通じて三足の土器は極めて少ない。類例としては、楽浪郡時代の木槨墓である黄海南道殷栗郡の雲城里第7号墓（文献41）から出土した、耳のない深鉢状の体部に細長い三足が付く砂混じりの胎土の土器（図35-1）が挙げられる程度である。楽浪土城にもこうした器形の土器があったかもしれない。

本研究室の資料中には、煤や焦げが付着したもの、底部や脚周辺が赤味を帯びたものがあり、こうした土器が実際に火にかけられたものと思われる。

これらの土器（片）57点中32点は出土地点がわかっており、22点がD区域に集中する。

こうした楽浪土城の実用と思われる土器の鼎は、漢代には他に類例がない。漢代には青銅製の鼎は実用に供された。また墓には土製の鼎が副葬される例が少なくないが、これは明器と思われる。

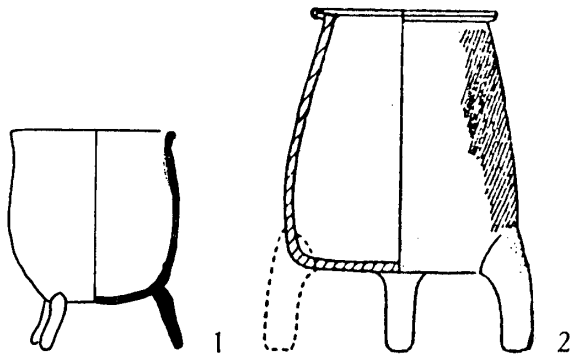


図35 他の遺跡出土の「鼎」(1/6)

1. 雲城里7号墓 2. 燕下都第22号遺址

漢代の生活遺跡から実用の鼎が出土した例はないようである。

楽浪土城の鼎との関連で注意されるのが、戦国時代に燕で用いられた滑石混入胎土の三足器である。深鉢形の胴部に短い三足が付くが耳はなく、器形は雲城里出土例に近い。図35-2は河南省易県の燕下都第22号遺址(戦国後期・文献50)の出土品であるが、同様の土器は天津方面でも出土している(文献47~49)。興味深いのは、この燕の土器が「模製

(型作り)」と報告されていることである(文献47, 50)。

このように楽浪土城の鼎と戦国時代の燕の「鼎」とは、胎土と製作技法に共通点が認められる。しかし両者の間には時間的、空間的な空白があり、両者の関係はなお検討を要する。

(2) 小型の容器(図36, 図版16-5~8)

滑石混入土器は完形がわかるものが少ない。便宜的に口径の大ききで分類し、口径10cm程度の土器を小型、20~30cm前後の土器を中型、それ以上の土器を大型とし、小さいものから順に紹介する。

図36-1~4は胴部がほぼ直立し、口縁は肥厚して水平に折れ曲がる口径10cm前後の土器である。1はくすんだ赤褐色で土器内面の口縁部以下に布目が圧印されている。布は極めて細かく、1cm四方で縦横各約50本を数える。2は灰色でやはり土器内面に1cm四方当たり50×50本ほどの細かい布目が残っている。3も灰色で内面にやはり同様の細かい布目が口縁直下から圧印されており、布の皺が縦に何本も走っている。4も灰色で内面の状態はほぼ同じである(図版16-5,6)。

5, 6は、ほぼ直立する体部から直角に折れ曲がった口縁が丸く上に向くものである。5は赤褐色で胴がやや張る。内面に布目は見られないが、磨滅した可能性もある。断面から、胴部の器壁の上に口縁部を重ね、内外面をなでて接合したことがわかる。5と同じ形の土器片の内面には炭化物が付着しているものがあり、この種の土器が煮炊きに用いられたことがわかる。6も赤褐色を呈し、胎土には白色の小礫が一粒含まれている。粘土紐の接合状態がわかる。破片の下半には1cm四方当たり50×50本の極めて細かい布とその皺が圧印されている。上半部は回転を利用して成形されている。上半部と下半部の粘土の継目が明らかで、まず下半部を形作りで成形したのち、その上に粘土を継ぎ足し、回転を利用して口縁部を作り出したものと見られる(図版16-7)。

7, 8は、底部の形態は不明だが、あまり器高の大きくない器であろう(図版16-8上)。7は灰色である、内面下半の一部に1cm四方当たり25×20本位の布目が残り、口縁の下には横方向の粗い擦痕がある。8は外面が灰色、内面は赤褐色である。類似の口縁部破片の内面に炭化物が付着した

楽浪土城址出土の土器（下）

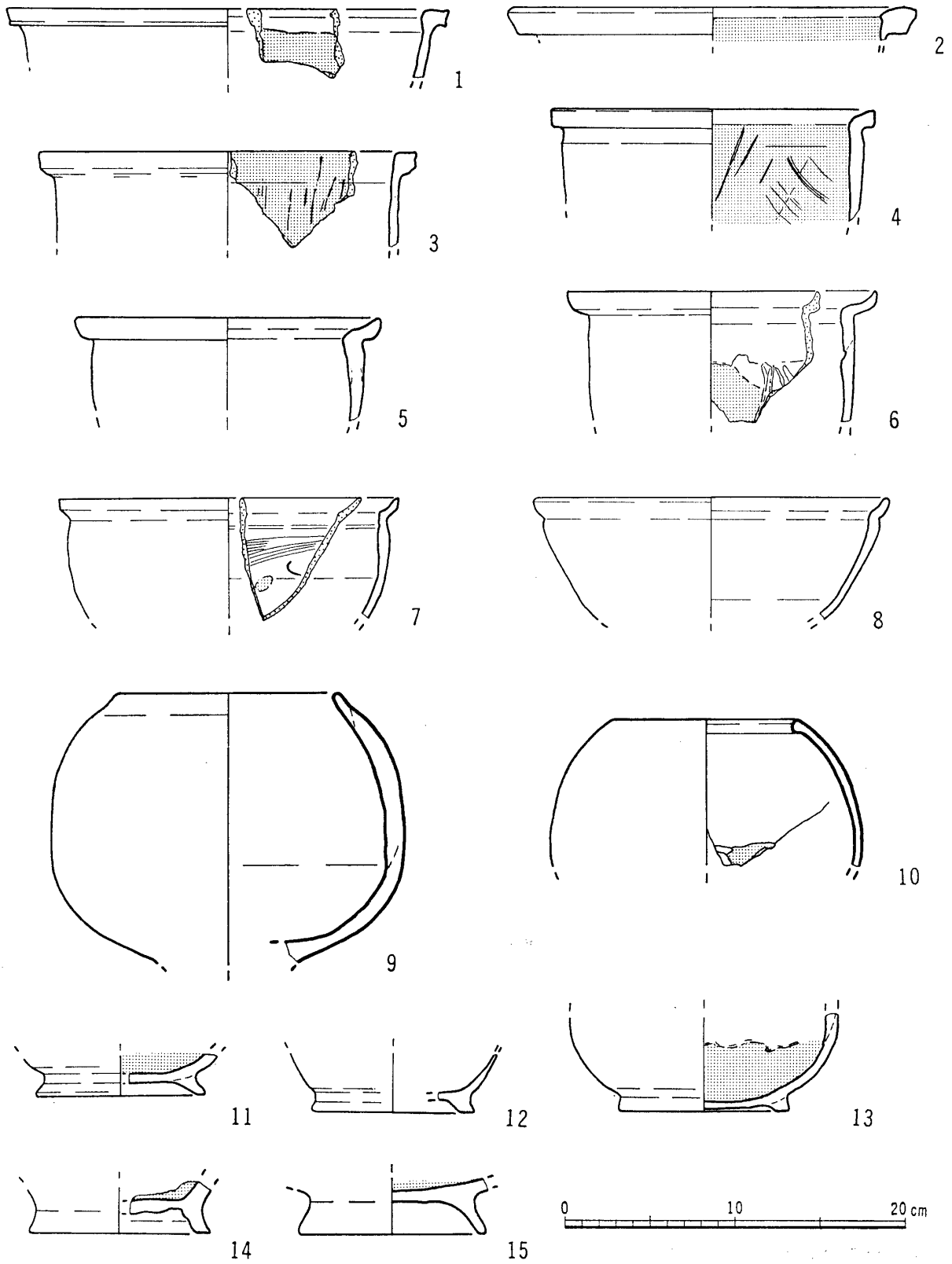


図36 楽浪土城 滑石混入土器 小型容器 (1/4)

ものがあり、こうした口縁をもつ土器も煮炊きに用いられたことがわかる。

9, 10は口縁が内傾する。9の胎土は粗くもろい。外面は灰褐色ないし褐色、内面は褐色を呈する。横断面は楕円形で、口径は推定 12~13.5cm, 胴部最大は推定 20~23cm である。下部を欠いているが、残っている部分からみて、このまま平底になるか、あるいは脚がついていたものと思われる。内外面に部分的に煤や吹きこぼれのようなものが付着している。10は灰色である。内外面の大部分は横なでされているが、土器片の内面の下端に布の圧痕がかすかに残っている。糸の痕跡を数えることはできないが、縦横の密度にはかなりの差があるようである(図版16-8下)。

小型薄手の土器の底部と見られるのは11~15の5点だけで、いずれも回転の利用を思わせる整った高台がつく。11は灰色で、器の内面には細かい布目が見られる。12は赤褐色で内外面ともヨコナデされている。13は外面が灰褐色、内面は灰色である。内面には1cm四方当たり各20~30本ほどの細かい布目が残っている。高台は貼りつけである。14はやや赤みがかかった灰褐色、内面には細かい布目がついているが、痕跡は不明瞭で糸の数まではわからない。15は表面が暗褐色、断面が灰色である。外面は褐色、器の内面は銀色、灰色、褐色で断面は灰色である。器内面にはやはり布目が残っている。一方向の糸の数は1cm四方当たり20本、直交する方向の糸の密度は痕跡が不明瞭で数えられない。

小 括

図36-1~4は、滑石入りの胎土、口縁の形態、土器内面の布目などから、楽浪郡地域の墓からしばしば出土する「典型花盆(植木鉢)形土器」と呼ばれる深鉢形の土器の破片、5, 6, 11~15は、胎土と器形から、楽浪郡地域の墓から出土する「変形花盆形土器」と思われる。

花盆形土器は、後述するように楽浪郡時代のほぼ全期を通じて墓に副葬された土器であり、形式的には変形花盆形土器が典型花盆形土器よりも後出する。

7, 8の土器片は、通常の花盆形土器とは異なり、あまり深くない土器のようであるが、これにコゲらしいものが付着していることは、花盆形土器ないしこれに近い器形をもつ土器が煮炊きに用いられた可能性を示している。

9, 10のような口縁が内傾した土器の破片は灰色系軟質土器にもある(図15-6, 9)。9も煮炊きに使用されたものであろう。

小型の滑石混入土器の内面には布目の見られるものが多い。布目は普通土器の下半に見られ、口縁部には布目は見られないことが多い。土器の下半はなんらかの型に布を被せたものに粘土を貼りつけて成形し、その上に内側から粘土をつけ足し、これを成形・調整して口縁部を作り出したものと考えられる。

(3) 中型の容器(図37, 38)

図37-1は高さ28cm, 口径26cm, 胴部最大径は27cmある。外面は灰色ないし灰褐色、内面は上部が灰褐色、下部が褐色である。口縁部内外面はヨコナデで調整されているが、外面は簡単になら

楽浪土城址出土の土器（下）

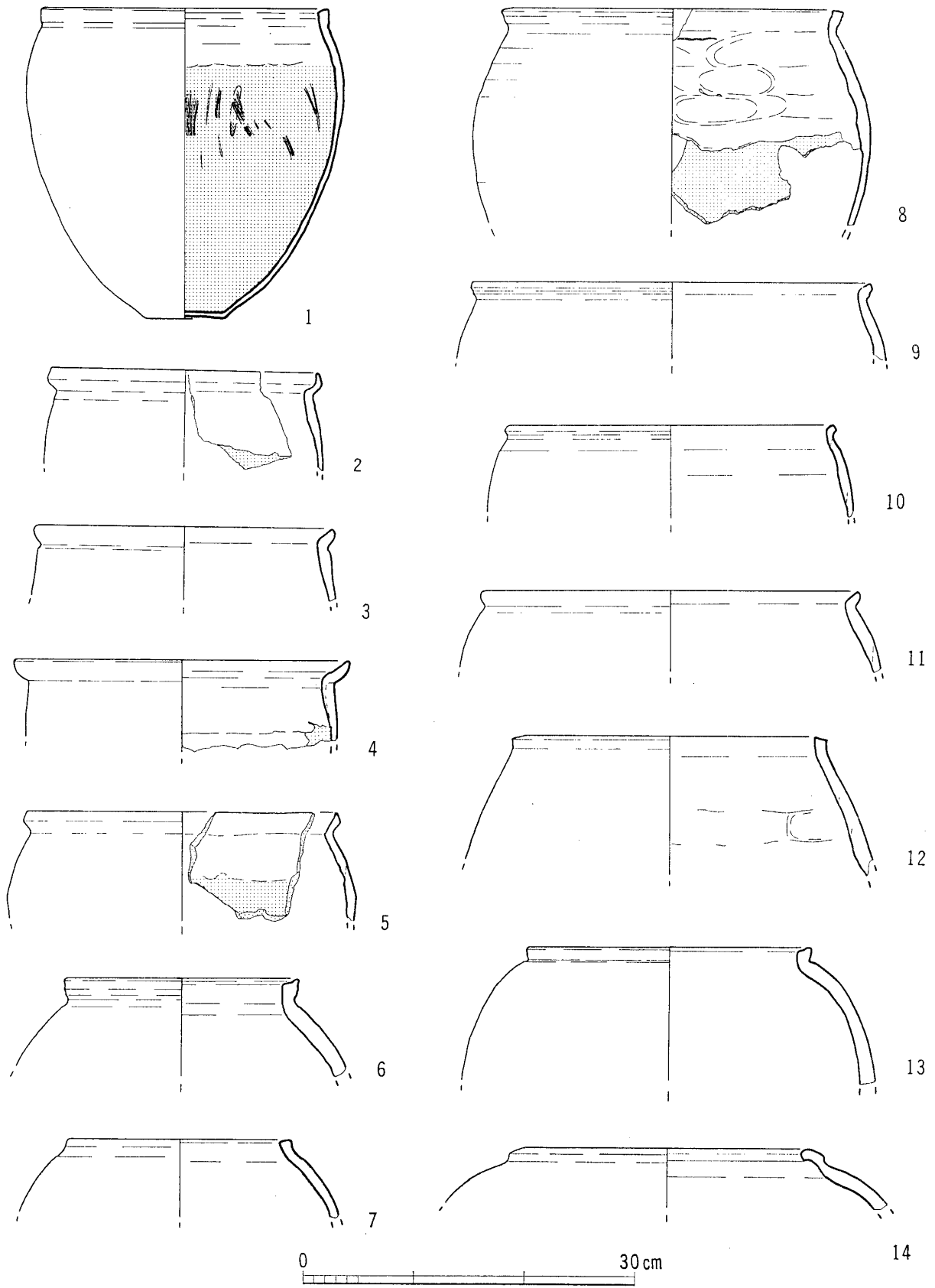


図37 楽浪土城 滑石混入土器 中型容器 (1/6)

した程度である。内面には細かい布目と布の皺が部分的に残っている。布目は細かく、1 cm 四方当たり50×50本ほどである。型起こしで成形した体部の上端に粘土を貼りつけ、これを調整して口縁としたようである（図版17-1）。

2～14は口径 20～30cm 強の口縁の破片である。底部の形状はわからない。口縁部内外面の調整には回転を利用したと思われるものが多い。

2は灰色、口縁部内外面は回転を利用したと見られるヨコナデで調整され、内面の粘土の継目の下には布目が残っている。3は赤褐色。4は赤褐色ないし灰褐色を呈するが外面の一部は煤がついて黒くなっている。内面の粘土の継目の下の一部に布の圧痕がかすかに残っている。5は灰色でやや胴部がはる器形である。口縁部はやや歪んでいる。内面の布目は明瞭ではないが縦糸・横糸の比率はかなり大きいようである。

6, 7は口がすぼまる、なで肩の器形である。6は表面が暗灰色、断面は灰色である。7は表層が赤褐色、断面の中心部が灰色である（2～7は図版17-2）。

8は5とほぼ同じ器形である。赤褐色であるが一部黒くなっている部分がある。口縁部だけがていねいに横なでされ、内面の上部には指なで、ないし指押さえのために生じた楕円形状の凹みが並んでいる。布目はやや粗く、1 cm 四方当たり10×10本位である（図版18-3）。

9は赤褐色ないし灰褐色（図版17-4左上）、10は赤褐色（図版17-4中上）、11は外面が暗灰色、内面が赤褐色、断面は灰色である。すべて内外面には横なで痕を留めるだけである。

12は赤褐色の土器片で、内面に粘土紐の痕跡を留めている（図版17-4 右上）。13は赤褐色の土器片からの復元図で、器形から鼎であった可能性も考えられる。14は灰色系軟質土器、灰色硬質土器、白色土器にみられる大型の甕の口縁に似ているが、器壁は薄い。赤褐色を呈する（図版17-4右下）。

図38-1, 2 は盆・鉢の類の口縁であろう。1は赤褐色で半透明の小礫を含む。口縁は不規則に波を打っており、内面の口縁部直下には横方向の粗い擦痕がついている。布目は1 cm 四方当たり15×35本程度である（図版17-4 中下）。

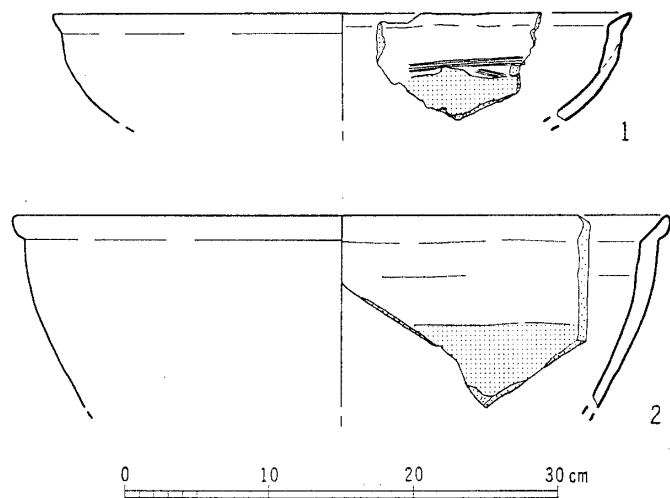


図38 楽浪土城 滑石混入土器 中型容器 (1/6)

2は部分的に銀色を呈する灰色の土器である。外面全面および内面上半は横なでされ、内面下半には布目（1 cm 四方当たり約20×50本）がついている（図版17-4左下）。

小 括

底部までわかるものは少ないが、口径 20～30cm の中型の土器は主に貯蔵や煮炊きに用いられたものとみてよいであろう。中型の土器にも、内面に布目のあるものが少なくない。製作技法

は小型の土器と同じであろう。

(4) 大型の容器（図39）

図39-1は黄褐色である。器壁の厚さは1.3cmほどであるが、復元口径は48cmに達する。2は暗い灰褐色である。内面に粘土の継目が残っている。壁厚は1.8cmとやや厚手である。3～5は白色土器などに見られる甕と同様の器形であろう。すべて赤褐色で4はやや暗い。5は胴部と口縁部の粘土の継目が明瞭である。6は灰色で一部銀色である。すぼまった頸部から口縁が大きくひろがる器形は、楽浪土城の大型の土器ではこれが唯一の例である。7も灰色で口縁上部が幅広くなり、口縁上面に凹線が同心円状にめぐる（図版17-5）。

8、9は大型の土器の胴部破片である。図の傾き、上下は確かではない。8は表面が灰色から赤褐色、断面は灰色である。外面に幅5cm、厚さ6mm前後の凸帯が貼りつけられ、凸帯の上にはさらに太い線が3条引かれている。凸帯以外の外面と内面全体は横なでされており、内面は特に強く調整されている。9は赤褐色から褐色を呈するが表面は剥落が著しい。幅2.5cm厚さ3mm前後の凸帯が貼りつけられており、凸帯上にはさらに凹線が3条平行に施されている。内面には横なで

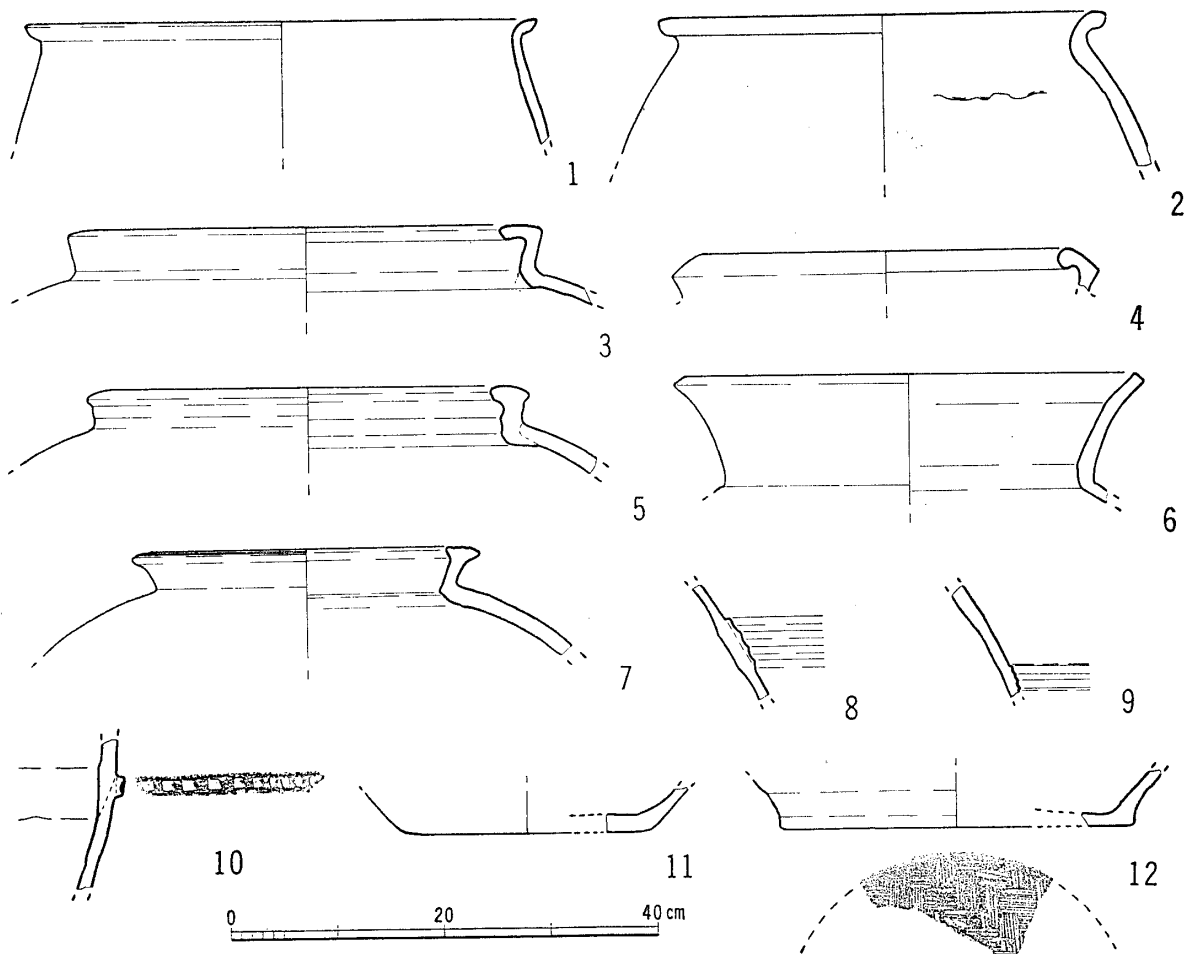


図39 楽浪土城 滑石混入土器 大型容器（1/8）

調整痕が認められる(図版17-7)。10は灰色の直径1m前後の土器の破片である。外面に幅1.5cm、高さ6mmの凸帯が貼りつけられている。凸帯上には幅9mmの角材および少なくとも幅9mmはある丸みを持った施紋具を、斜めに連続的に押しつけている。図を基準とすると方形の圧痕は左が深く、楕円形の圧痕は右が深い。二人の工人が違う施紋具を持って一つの場所から逆方向に回りながら施紋していった結果であろう(図版17-6)。このほか、暗赤褐色で厚さ3cm、復元径1m前後になる大型の球形の土器の破片がある。

滑石混入土器の厚手の底部破片は11、12の2片だけで、ともに淡い灰褐色を呈する。11は無紋であるが、12には底部に網代痕があり、土器成形時にアンペラ状のものを台として用いたことがわかる(図版18-3)。

小 括

大型の容器はいずれも貯蔵用であろう。器形は灰色系土器、白色土器などと共通するものもある。土器内面に布目が付いているものはない。

(5) その他(図40)

図40-1は圈足が付く土器の破片である。器の内面には布の圧痕がかすかに残っている。脚部は内外面とも横なで調整されて、3箇所に通かし孔と見られる切り取りがある。表層は褐色、断面は灰色である(図版18-4)。

2~7は上下、傾きが不明の土器片である(図版18-1)。2は復元直径が30cmほどらしい。内面側には落とし蓋の受けのようなものがあり、外面には凸帯がついている。表面は赤褐色、断面は灰黒色である。3は孔のあいた赤褐色のつまみ状のものである。4は口唇状の把手である。表面は暗赤褐色、断面は赤褐色である。5は銀灰色の輪状の把手である。6、7は大型の把手でかなり大型の土器についていたものと思われる。6は灰色、7は暗赤褐色である。7の胎土は前述の厚さ3cmの大型の胴部破片によく似ている。

8、9は孔のあいた蓋か、あるいは上下逆で甑ないし濾過器の一種かもしれない。8は灰色で胎土はやや粗い。突起のつかない側の面には細かい布目がついている。9は赤褐色で、これには布目は認められない。

10~13は蓋であろう。10は銀灰色で上に輪状のつまみがついていたと思われる。11は灰色から褐色を呈する。推定径12cm弱の円板の周囲はヘラで削られているが、回転は利用されていない。突起の反対側の面には細かい布(1cm四方当たり30×30本程度)とその皺が圧印されている。12は直径20~21cmで突起部は失われている。胎土は灰色で粗い。13は赤褐色から灰色である。やや歪んでいるが、輪状のつまみがついた直径22cm程度の蓋であろう(8~12は図版18-2)。

小 括

1に類似する破片は灰色系軟質土器にも1点ある(図15-8)。ともに三角形の透かし孔のある圈足をもった土器であった可能性がある。

楽浪土城址出土の土器（下）

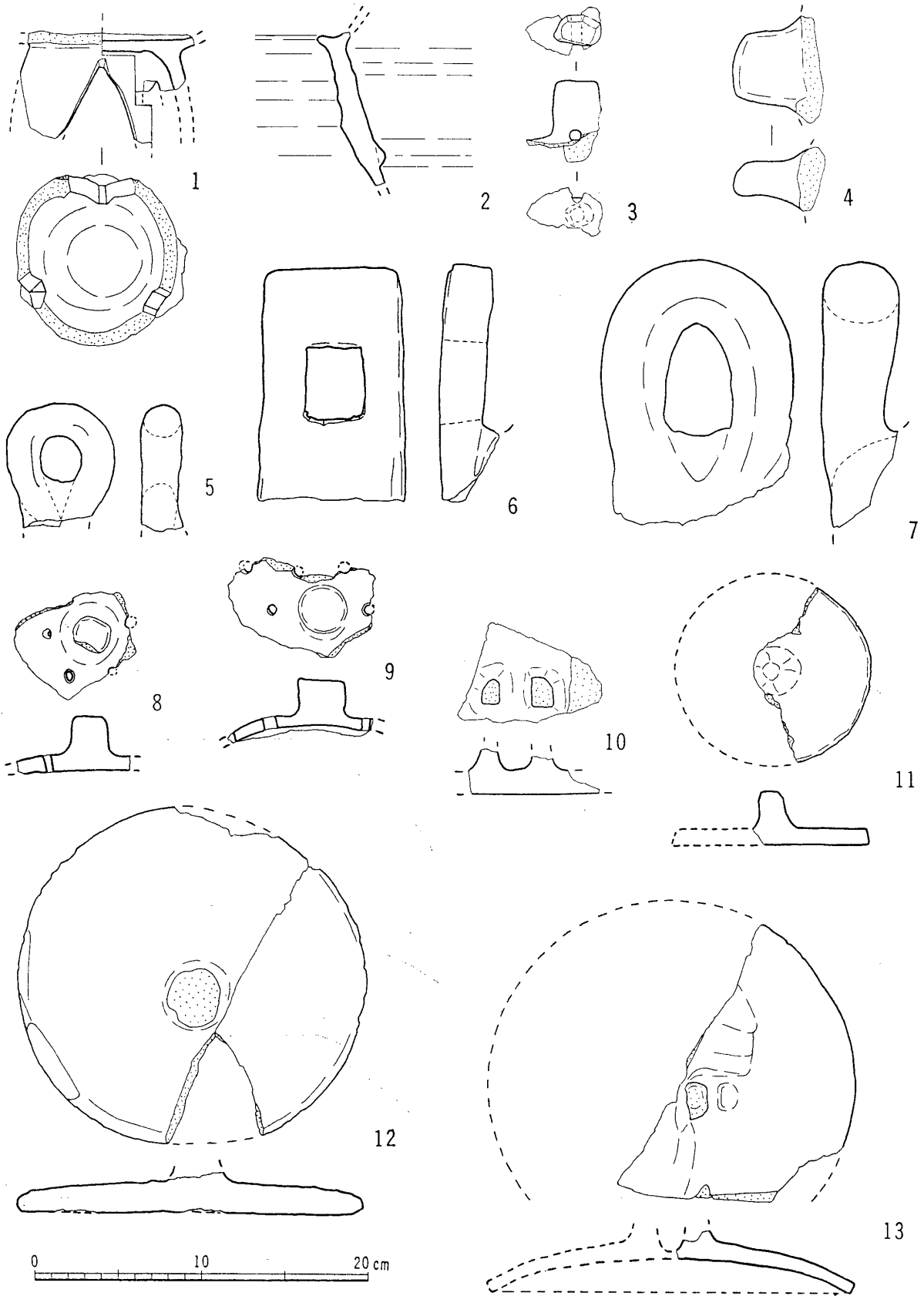


図40 楽浪土城 滑石混入土器 把手・蓋など (1/4)

8～13の蓋は8がCトレンチで出土したほかはすべてD区域の出土で、D区域でも北側に多い。

5. 白色土器

白色の粗砂を交えた粗い胎土の白色の土器である。完形品はない。21点あるが、2点が薄手（厚さ約5mm）であるほかは、すべて厚さ1cm前後の厚手の大型の土器である。叩き技法で成形され、なで仕上げされたようで、胴部外面や口縁上端に打捺された縄目がかすかに残っているものがある。内面は横方向に粗くなでられたものが多く、当て具痕を留めているものはない。口縁部は回転を利用して仕上げられており、形は軟質灰色系土器、硬質灰色系土器の甕とよく似ている。口縁は2種に分類される。

甕A（図41）

頸部が直立ないしやや外反し、口縁が肥厚するタイプで、図示した3点しかない。3は破片から復元する限りこの種の土器では口径が最も小さい。口縁部内面に指押さえの跡がみられる（図41-1が図版15-10）。

甕B（図41）

頸部がほとんど無く、胴部からS字状に内向する口縁となるもので、軟質灰色系土器、硬質灰色

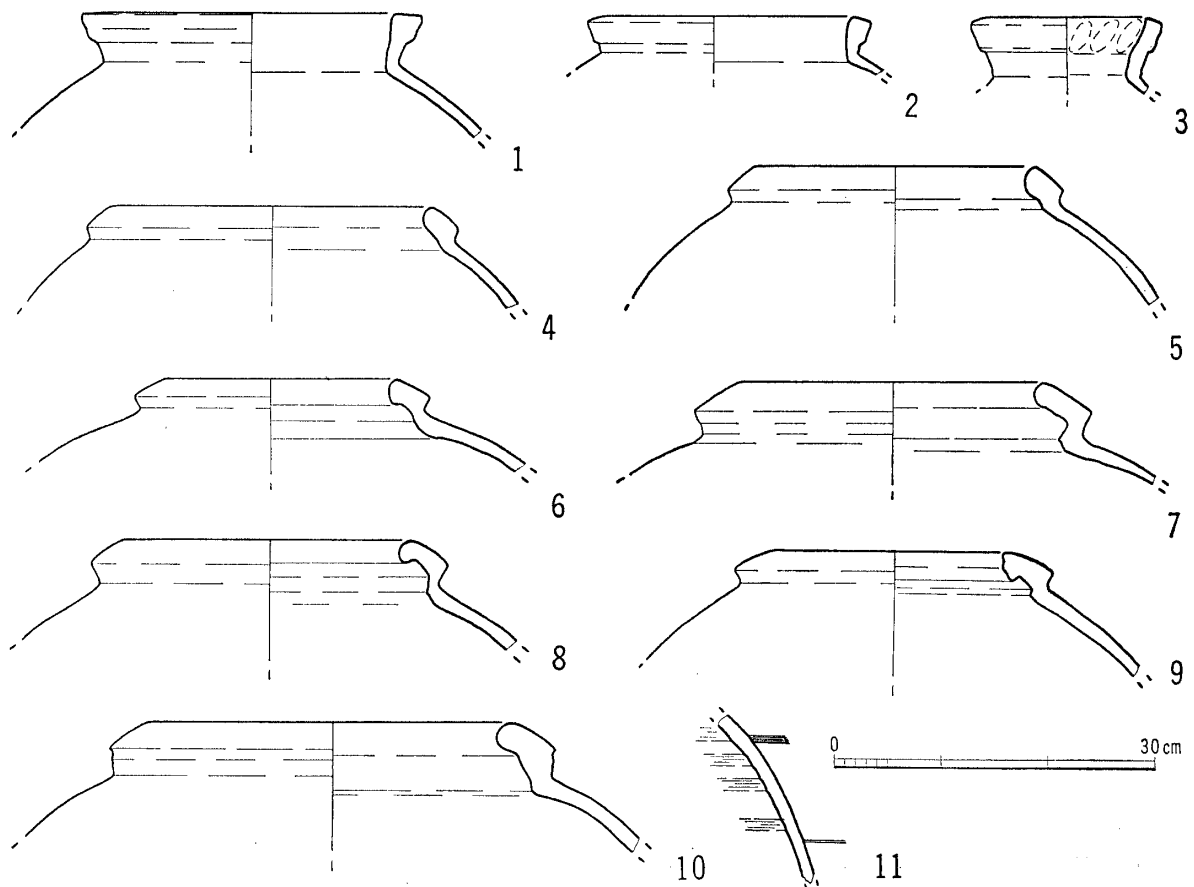


図41 楽浪土城 白色土器 甕 (1/8)

楽浪土城址出土の土器（下）

系土器の大甕と共通する器形である。口縁の形態には細かい変化がある。7, 9（図版15-11）, 10はやや赤みがかっている。

胴部破片（図41）

4点ある。器形をうかがわせるものはない。2点は厚さ約5mm内外で胎土は他よりさらに粗い。厚手の2点のうちの1点には（図41-11）には、外面に幅8mmの櫛目と幅2mmの沈線が水平方向に施されているが、これが白色土器中唯一の装飾である。この土器片の内面には横方向の幅1cmの擦痕が4条認められる。

小 括

以上図示した白色土器は、前漢末ごろから魏晋代に至る楽浪郡地域の墓からしばしば出土する、球形に近い体部をもつ白色の大甕（後述）の破片であろう。大きさと器形から、おもに貯蔵に用いられたと考えられる。

21点中10点の出土地点がわかるが、薄手の胴部破片2点がAトレンチから、図33-6がE'トレンチから出土しているのを除けば残りの7点はD区域出土であり、しかもそのうち5点はD²V区の出土である。

6. その他の土器

以上の胎土に基づく分類からもれる土器が若干ある。さまざまなものを含むが便宜上ここにまとめておく。

図42-1, 2は厚手の小型の腕状の器である。ともに胎土はきめ細かく、砂を含まず、軟質である。1は赤褐色、内外面ともなでられて平滑である。2は黒褐色、外面は平滑であるが、側壁内面はヘラで削り取られたようである。

図43-1~6はきめ細かい粘土に砂を比較的多く混ぜた軟質の土器である。

1は淡褐色軟質の土器で、灰色系軟質土器のうちの褐色のものに近いが、粗い砂を混ぜている点異なる。口縁は内傾し先端が肥厚する。底部の形態はわからない。内外面とも横なでされており、内面下半には左下がりの浅い沈線が何本も引かれている（図版18-6）。2も淡褐色軟質であるがやはり粗砂を含む。外面は軽く横方向になでられている。3は手づくねの小型杯で、色は赤褐色である。4の上下、傾きは確かではない。表面は赤褐色、断面は灰色である。5は孔のあいたつまみで、

灰色である（2~4は図版18-5）。6は横断面が多角形に近いことから鼎の脚かと思われるが、豆の脚の可能性もある。赤褐色で焼成は弱く、水洗すると溶ける。

図43-7~11は砂を含んだやや粗い胎土で、褐色系統の色調に焼成されている。

7は破片からの復元図で、残存状況の関係で

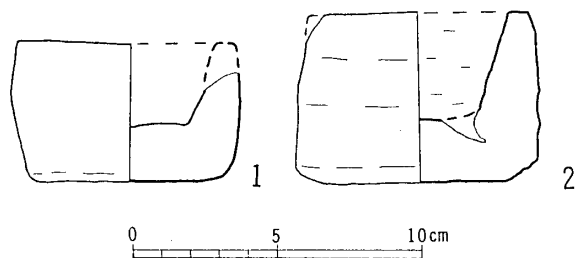


図42 楽浪土城 その他の土器 厚手小型鉢 (1/3)

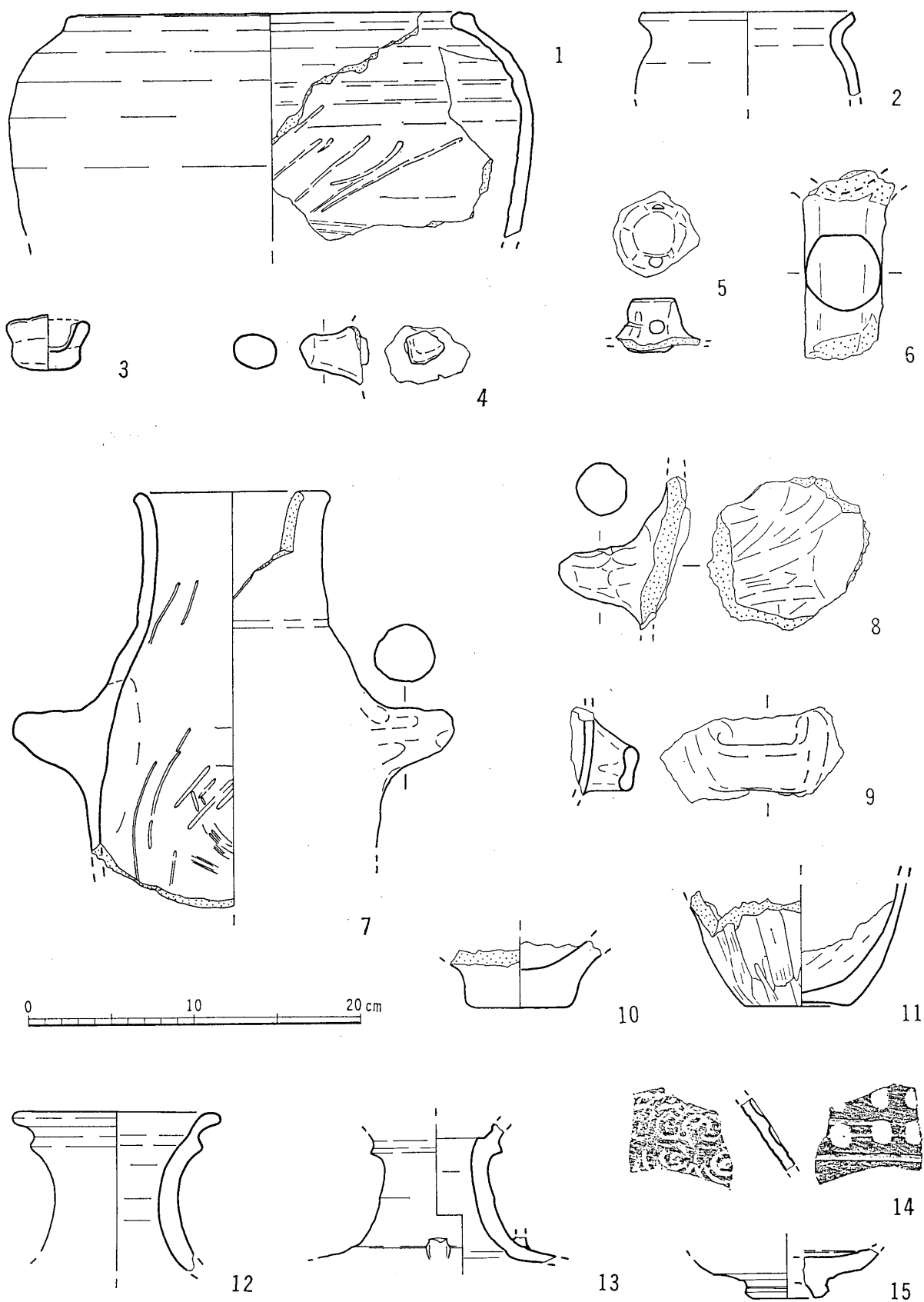


図43 楽浪土城 その他の土器・陶器 (1/4, 7は左に断面を示した)

楽浪土城址出土の土器（下）

断面を通常とは反対に描いている。胴部は全体の3分の1ほど残っているが歪んでおり、正確な復元は困難であるが、口径は12cm弱のようである。細砂と少量の白色粗砂を混ぜたやや粗い胎土で軟質である。表面の大部分は黒色だが、口縁部は内外面に赤褐色の部分がある。断面は灰色である。内外面とも口縁付近には横方向の細かいヘラ調整痕が認められる。内面下半にはヘラ先でなでたような痕跡が多数つけられており、右上がりのものが圧倒的に多い。牛角状の把手は、粘土の継目からは、器壁に穴が開けられた孔の内側から突起を押し出すようにしてはめ込んだように見える（図版18-7）。

8は赤褐色で胎土は粗く、3mm角ほどの白色の粗砂を含む。把手には指押さえ痕が認められ、土器内面には右上がりの擦痕が顕著である（図版18-9）。同様の牛角把手破片はほかに2点ある。

9は滑石の細かい粉を多量に含むきめの粗い胎土である。薄い褐色ないし灰褐色で、普通の滑石混入土器よりも軟質である。図の上下、傾きは確かではない（図版18-10）。胎土、形が共通する小片がもう1点ある。

10は白色の粗砂を混ぜた褐色のきめの粗い胎土の土器で、断面は灰色を呈する。底面は平滑で、内面は特に整えられていない。11は赤色の砂を含む赤褐色土器で、断面は黒褐色である。外側面は先端の粗いヘラによって縦方向に削られている。底面はやや上げ底気味で平滑である。内面には縦方向の擦痕がある。

小 括

図42-1, 2は胎土のきめが細かいこと、成形にヘラを使っていることから、軟質灰色系土器との関連も考えられるが、相違点も多い。

図43-1の器形は、軟質灰色系土器、滑石混入土器に通じるものがあるが、内面のヘラ先による斜めの擦痕は、次の「無文土器」の内面処理に近い。同1～3, 5, 6も軟質灰色系土器、滑石混入土器に類似する器形の土器があるが、胎土・調整技法には違いがある。

7～11は、朝鮮の「無文土器」と思われる。

7, 8は無文土器に多い牛角形把手である。牛角形把手は朝鮮半島西北部ではコマ形土器と灰色縄蓆紋土器の間に編年される明沙里型土器にあり、その年代は前3世紀頃と考えられている（文献19）。出土地点は7がD⁴Ⅳ区、8はD⁴Ⅰ区、他はD⁴Ⅱ区、D⁴Ⅰ区で、少なくとも後の三者の出土地点は比較的固まっている。この付近からは磨製石斧も出土しており、この一帯に楽浪郡以前の遺物が集まっていた可能性がある。朝鮮南部では、牛角形把手は無文土器後期から三国時代にかけて盛行した。朝鮮南部に角形把手が現れるのは、九州の弥生中期に平行する時期と考えられており（文献46）、楽浪郡の存続時期にあたる。器形でみればかぎり土城出土の牛角形把手は、明沙里型土器とも朝鮮南部の無文土器ともよく似ている。出土地点からみて、土城出土の牛角形把手は楽浪郡以前の遺物である可能性が高いと考えられるが、楽浪郡時代にもこうした土器が残っていたと考えられないこともない。資料の増加を待ってさらに検討したい。

9と類似のもう1点はともにB”トレンチの出土である。細かい砂を混ぜた淡褐色の胎土で、形

は美松里型土器か初期高句麗の土器にみられる橋状の把手に近い。橋状の把手は軟質灰色系土器にもあり、あるいはそれとの関連を考えるべきかもしれない。

10, 11も胎土から無文土器の系統に属する土器の底部破片と思われる。

7～11は楽浪郡以前の遺物の可能性が高いと考えるが、楽浪郡と無文土器を使用していた地域との交渉を物語る資料である可能性もなくはない。

7. 施釉陶器

図42-12は、砂が混じったやや緑がかった灰色の磁器に近い胎土に、灰緑色の釉が掛かった施釉陶器である。釉は均一にはかかっておらず、釉がたまっているところもあれば地肌が露れているところもある。13は軽石のような質感の多孔性に富む淡褐色の粗い胎土に、ややくすんだ黄色の釉が薄くかかったものである。同一個体かと思われる小片がほかにも若干ある。14は内面、断面が褐色で、外面に黒い釉がかかっており、堅緻である。外面には指頭圧痕のような凹みと幅3mmの浅い凹線があり、内面には青海波紋の当て具痕がある。15は高台底で薄緑の釉がかかっている、地は褐色である。外面の釉は高台には及んでいない。

これらの施釉陶器の年代は未詳であるが、楽浪郡時代よりもはるかに新しい時代のものであろう。

8. 土器に関する考察

以上で本研究室保管の楽浪土城出土の土器（土製品は別）を胎土別に紹介した。全部で501個体分あり、内訳は軟質灰色系土器297点、硬質灰色系土器8点、滑石混入土器150点、白色土器21点、その他の土器16点、施釉陶器9点である。

楽浪土城出土の土器が提起する問題は多岐にわたるが、ここではひとまず土城出土の楽浪郡時代の土器の特徴と変遷、土城内での出土の位置などについてまとめることにする。そのほかの問題については別途論じることにした。

(1) 出土土器の分類と年代

これまで紹介してきた土器は、「楽浪富貴」銘文字瓦当、「楽浪太守章」封泥や多くの漢式遺物とともに発掘されたことから、大部分が楽浪郡（前108年～後313年⁴⁾）に関係するものと予想される。しかし出土品には後世の遺物も含まれており、楽浪土城の研究にあたってはまず個々の遺物の年代を検討する必要がある。土器の紹介の際、いくつかの土器の年代を考察したが、ここで全体をまとめたい。

土器の紹介に当たっては、灰色系の土器を硬さによって軟質と硬質に区別した。しかし軟質灰色系土器と硬質灰色系土器は、胎土に砂をほとんど含まず細かい粘土を用いる点が共通し、器形・製作技法もほとんど同じである。以下の考察では、特に必要のない場合は軟質と硬質を区別せず、灰色系土器とまとめて呼ぶことにする。

楽浪土城址出土の土器（下）

出土土器の多数を占める灰色系土器、滑石混入土器、白色土器には、楽浪郡時代の土器と判断されるものが少なくない。すでに各土器の項で述べたように、灰色系土器の小型・中型の罐、盆、有脚土器、鳥形つまみ、滑石混入土器の典型・変形花盆形土器、白色土器の大甕などは、楽浪郡時代の木槨墓や埴室墓から出土する土器と共通し、楽浪郡時代のものであることがほぼ確かである。また筒杯、罐、小型鉢をはじめ、土城出土土器と胎土、器形、製作技法が共通する灰色の土器が、対馬と九州北部の遺跡で出土している。これらの土器は九州北部の弥生中期末から弥生時代終末・古墳時代初頭にかけての遺物と共伴していることから、西暦紀元前1世紀後半ごろから後3世紀ごろの土器と考えられる。このことから逆に、土城出土の同形式の土器は楽浪郡時代のものであることと、九州出土の灰色の土器は楽浪郡地域から運ばれたことが推測される。

これら3種の胎土の土器は、上に挙げなかったものも含めて、各胎土の土器相互で器形、製作技法が共通するものが多く、また胎土の異なる土器同士でも共通性が少なくないので、全体の年代幅はあまり大きくないと予想される。

これらの点から、灰色系土器、滑石混入土器、白色土器のほとんどが、「楽浪郡の存続したころの土器」と推測する。

しかし一部には問題がある土器もある。特に灰色系土器の図19-22、23、図20-11、図22-3、図27-3、図29-4、図32-1,2の土器などは、器形、胎土、技法などの面で他の土器との違いが目立ち、時期を異にするものか、他地域からの搬入品であった可能性が考えられるので、当面「楽浪郡のころの土器」からは除いておきたい。

「その他」としてまとめた一群の土器の年代はやや不確かである。「無文土器」と思われる土器の多くは、楽浪郡以前の土器と考えられるが、楽浪郡時代の南部朝鮮の無文土器と関連をもった土器である可能性も否定できない。その他の土器は、灰色系土器、滑石混入土器などに近いようにも思われるが、年代検討の手掛りを欠いている。これらの土器もひとまず「楽浪郡のころの土器」からは除いておく。

施釉陶器の年代は未詳であるが、後世の遺物で、楽浪郡とは直接関係ないものと思われる。

このように本研究室保管の楽浪土城出土品のうち、少なくとも灰色系土器、滑石混入土器、白色土器の3種の胎土の土器（問題のある一部の土器を除く）が、「楽浪郡のころの土器」と考えられる。

楽浪郡に関係する遺跡としては、北部朝鮮で発見されている土城と墓があげられる。これらの遺跡では、楽浪土城出土の「楽浪郡のころの土器」と同系統と思われる土器が存在することが確認または推測できる。

土城内外の遺物の状況や周辺の墓から、楽浪郡と関係が深いと考えられる土城は、楽浪土城のほか5箇所（咸鏡南道永興郡所羅里土城、平安南道温泉郡於乙洞土城、黄海北道載寧郡智塔里土城、黄海北道信川郡青山里土城、同殷栗郡雲城里土城）ある。このうち黄海北道載寧郡智塔里土城では発掘調査が行われ、出土の土器は楽浪土城の土器に近いことが報告書から確認される（後述）が、

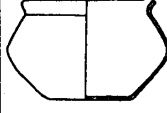
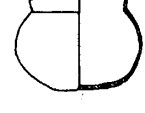

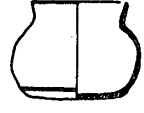
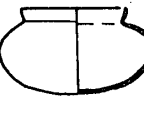
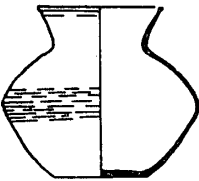

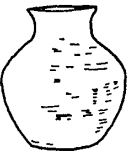




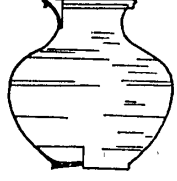
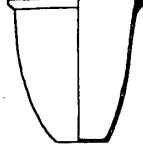
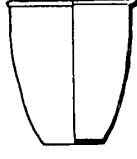
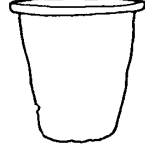

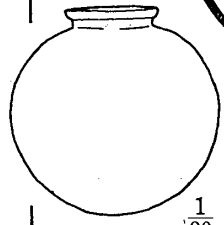
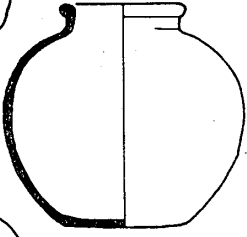
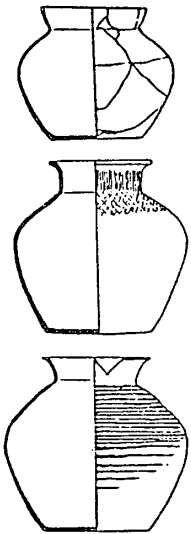

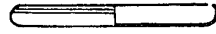




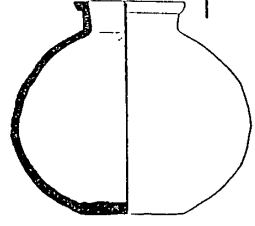
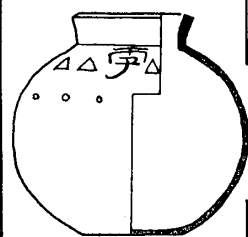
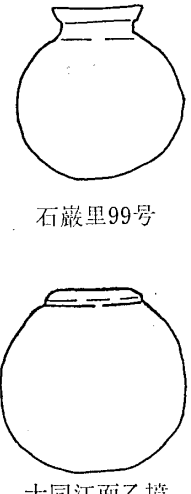
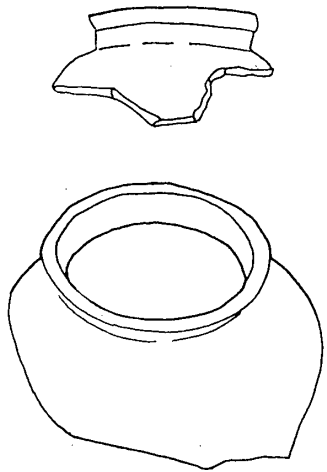
	単葬木槨墓	併穴合葬木槨墓		中央間仕切り型	同一内槨型木槨墓	
	貞柏洞92号	貞柏洞37号	貞柏洞3号	石巖里219号	貞柏里219号	石巖里9号
	異体字銘鏡	異体字銘鏡3 地節4年銘漆器	星雲鏡 異体字銘鏡		異体字銘鏡 方格規矩四神鏡	内行花紋鏡2
灰色系土器	 繩蓆紋	 (他に小型罐1)	 繩蓆紋 繩蓆紋罐4 無紋罐5 瓶(無紋)1	  	   	  
	滑石混入土器		花盆形土器2			
白色土器			丸い胴に短かい 頸のついた甕		 $\frac{1}{20}$  $\frac{1}{20}$	

図44 楽浪土城周辺の墓の副葬土器 (注記のないものは約1/10)

楽浪土城址出土の土器（下）

(同一内櫛型)	木室墓	博室墓	
石巖里205号	南井里116号	貞柏里1号ほか	石巖洞古墳
内行花紋鏡 2 その他後漢鏡 2 永平12年銘漆器	半肉彫一仙五獸帯鏡		内行花紋鏡 盤龍鏡
 <p>静止系切り (他に罐3)</p>	 <p>回転系切り (他に罐2)</p>  <p>$\frac{1}{20}$</p>	 <p>貞柏里1号 貞柏洞69号</p>	 <p>静止系切り</p>
		 <p>石巖里99号</p>	
 <p>(他に甕1)</p>		 <p>石巖里99号 大同江面乙墳</p>	

他の土城の土器については、過去および現代の調査者の報告から、楽浪土城出土土器と類似の土器が多数存在することが推測されるにとどまる⁶⁾。

楽浪郡時代の木槨墓・埴室墓は、平安南道、黄海南・北道北部および咸鏡南道・平安北道の一部に存在し、その副葬土器が胎土・器形などの点で楽浪土城の土器と共通することは、日本へもたらされた一部の遺物と戦前・戦後に出版された報告書から確認することができる⁶⁾。

このように楽浪土城出土の「楽浪郡のころの土器」（灰色系土器、滑石混入土器、白色土器）と同系統と推測される土器は、楽浪郡に関係する各地の土城と墓から出土した土器の主体をなしていると考えられる。そこでこの一群の土器を、仮に楽浪土器と総称することにする。楽浪土器は平安南道、黄海南・北道北部を中心に分布し、年代的にはこの分布地域の無文土器と三国時代の土器の中間に位置づけられる。ただ次に述べるように楽浪郡存続期間の前後の土器はほとんど知られておらず、三者の関係の解明は今後の課題に属する。

(2) 出土土器の変遷

楽浪土城出土の楽浪土器には一定の年代幅があることは、これまでの考察で明らかである。土器の年代の考察には出土状況を基準とすべきであるが、現在の資料からは十分な情報は得られない。そこで年代が比較的確かな墓および他の土城、さらには日本出土の楽浪土器から、楽浪土器の変遷を探り、それにもとづいて楽浪土城出土土器の年代と変遷を検討することにする。

① 平壤の副葬土器の変遷

楽浪土器を副葬した墓は木槨墓と埴室墓である。調査・報告された木槨墓と埴室墓は少なくないが、ここでは楽浪土城に近く、かつ調査がもっとも進んでいる平壤の墓の副葬土器を概観する。平壤以外の地域の墓の構造と副葬土器には、若干の地域差は認められるが、基本的にはほぼ同様の変遷をとげたようである。

図44（以下「図」と略す）は、主に銅鏡の編年と紀年遺物に基づき⁷⁾、墓の構造の変遷などを考慮して、楽浪土城周辺の代表的な墓の副葬土器をおおよその年代順に配列したものである。

木槨墓は長方形の土壇に木材を組み合わせて作った槨を設け、その中に木棺をおさめる形式の墓で、木槨の上に墳丘を築くものが多い。木槨墓はさらに、一つの木槨に一つの木棺を納める単葬墓と、それぞれ一つの木棺を納めた二つの木槨を並べて別々に築く併穴合葬墓、一つの木槨に二つあるいはそれ以上の棺を納める同穴合葬墓（冢槨墓とも呼ばれる）がある。同穴合葬墓には2棺の間に間仕切りの入る中央間仕切り型と、木槨内に造られた内槨に2棺（時に3棺）を納める同一内槨型がある。このほかに横穴式の構造をとる木室墓というべき墓もある。年代的には上述の順に出現したことが確認されており、楽浪郡設置以前から、おおむね後漢末までの墓と考えられる。

埴室墓は、小型の長方形の埴を積み上げて墓室を築き、その外側に土を盛り上げて墳丘とするものである。埴室墓もいくつかの型式に分けられるが、もっとも典型的なのは、やや胴張りの正方形

楽浪土城址出土の土器（下）

に近い平面のドーム天井の墓室1～3室からなるものである。塚室墓の初現は同一内椀型木槨墓の時期と考えられるが、典型的塚室墓は後漢末期から魏晋のころに盛行したものと考えられる。典型的塚室墓の下限ははっきりしないが、楽浪郡滅亡とされる313年ごろとみてよいであろう⁹⁾。

墓に副葬された土器は、土城出土土器と同様に、灰色系土器、滑石混入土器、白色土器が主である。施釉硬陶や施釉軟陶も副葬されることがあるが、数量は少ない。

平壤周辺に木槨墓が造られるようになったのは、楽浪郡設置以前にさかのぼる。正式に調査された楽浪郡以前と考えられる墓には、細形銅剣と「細地紋鏡」を副葬した貞柏洞97号墓(単葬木槨墓)がある。貞柏洞97号墓は鏡の年代から前2世紀中葉を下らないと言われる。この墓からは土器は発見されなかった(文献42)。

墓に土器が副葬されるのは楽浪郡設置前後からである。前1世紀の木槨単葬墓には、きめ細かい灰色の胎土の小型罐と、滑石や石綿を混ぜた灰色または褐色の胎土で口縁に肥厚帯がめぐる平底の植木鉢形の土器(典型花盆形土器)を1点ずつ副葬するものが多い。花盆形土器の内面には布の圧痕がついているものが多い。

土器を副葬した墓で、今のところ最古のものは、星雲鏡を副葬した土城洞4号墓(文献40)である。鏡の製作年代は前1世紀前葉と考えられる⁹⁾から、楽浪郡設置以後まもないころの墓と推定される。この墓からは底部に縄蓆紋がある口径15cm内外の褐色の罐と、胎土に石綿を含む灰色の花盆形土器が出土した。花盆形土器の内面には布目が残っているという。土器の図や写真は公表されていないが、記述からみて、土器は夫租蔵君墓(文献39)や貞柏洞92号墓(図・文献44)の副葬土器とほぼ同じものと思われる。

前1世紀後半に始まる併穴合葬墓になると、貞柏洞37号墓(図・文献44)のように各椀に従来通りのセットを一組ずつ納める墓もあるが、新形式の土器を多数副葬する墓も現れる。貞柏洞3号墓(図・文献45)では胴部に縄蓆紋のある小型罐のほかに、これより大きい縄蓆紋罐4点、小型・中型の無紋の罐5点(うち1点は底部にムシロ紋のような紋様があるという)、狭く長い頸部を持つ無紋の「瓶」1点、滑石混入の花盆形土器2点、白色の「丸い体部に短い頸部の付く大きい罐」を副葬し、従来の副葬土器のセットから変化している。花盆形土器はともに破片であるが、一点は典型花盆形土器の口縁、もう一点は後に普及する変形花盆形土器の底部のようである。この墓は白色土器を副葬する最古の墓でもある。

中央間仕切り型同穴合葬木槨墓は、西暦紀元前後から後1世紀前半と考えられる。土器は、併穴合葬墓の傾向を引き継ぎ、新しい器形が多くなる。貞柏洞2号墓(文献45)では小型罐3点(縄蓆紋1点・無紋2点)「中間の大きさの黒褐色の罐」、滑石混入の花盆形土器、白色の大甕があり、組成は貞柏洞3号墓に近い。石巖里219号墓(王根墓・図・文献15)には灰色の罐3点と滑石混入の典型花盆形土器1点が副葬されていた。

同一内椀型木槨墓が造られた時期はおおむね後漢代である。灰色系の罐には器高20cm未満の小型のものと、器高30cm前後の中型のものがあるが、ともに縄蓆紋はみられなくなる。滑石混入土

器では、典型花盆形土器が減少し、口縁が折れ曲がり、胴部がやや湾曲し高台底を持ついわゆる変形花盆形土器が増加する。白色土器には器高 30cm 前後の中型のものと、器高 40cm 以上の大型のものがあり、器形は短い口縁が直立するもの（本稿の甕A）と頸部がなく口縁がS字状に内弯するもの（甕B）がある。胴部は球形に近い（石巖里197号墓・文献12）。施釉硬陶も出土している（貞梧洞5号墓・文献45）竈などの明器を副葬する墓（貞柏里19号墓・文献10，梅原考古資料）は同一内槨型木槨墓の終末期のものであろう。

貞柏里 127 号墓（王光墓・図・文献11）では、灰色系土器の罐はやや細身のものが多く、滑石混入土器の典型花盆形土器、白色土器の甕Aがある。石巖里 9 号墓（図・文献26）には、灰色系土器の小型罐と白色土器の甕がある。小型罐は平底で、側面下半は回転を利用しないヘラ削り痕がある。白色土器には図のほかに大型の甕Bがある。

永平12年（後69年）銘漆器を副葬した石巖里 205号墓（王肝墓・図・文献32）には内槨はないが、主室の3棺の両側に立てられた板が内槨を意識したものと見られるので、ひとまず同一内槨型に準じたものとしておく¹⁰⁾。4棺を埋葬していることから、木槨墓としては新しい時期のものと思われる（文献15）。土器には灰色系土器の中型罐6点と滑石混入土器の変形花盆形土器1点、白色の中型甕3点がある。罐の底面には静止糸切り痕が、胴部側面下半には回転を利用しないヘラ削りがみられ、表面には暗紋風の装飾がある¹¹⁾。

南井里 116号墓（彩篋塚・図・文献17）は横穴式二室の木室墓で、副葬の鏡から同一内槨型木槨墓の終末期ないしそれ以降の時期と考えられる。灰色系土器の中型罐と円形の案、白色土器の甕がある。罐の底面には回転糸切り痕がある。円形の案の存在は埴室墓の副葬土器との関連をうかがわせる。

典型的な埴室墓の出現はおそくとも後漢末期で、当初は木槨墓と併存し、楽浪郡時代の末期まで造られたものと思われるが、墓の編年研究は進んでいない。したがって副葬土器は埴室墓出土としてまとめざるをえない。

木槨墓の副葬土器が罐、花盆形土器、大甕にほぼ限られるのに対し、埴室墓の副葬土器は器種が増加し、組み合わせも墓ごとに多様な状況を示す。木槨墓と同様に灰色系土器の罐、滑石混入土器の変形花盆形土器、白色の大甕を副葬したもの（大同江面乙墳・図・文献25）もあれば、木槨墓には見られない日常什器の明器のような器種を主体とした墓（貞柏里1号墓・図・文献26）もある。また木槨墓副葬土器にはみられない楯描の紋様や橋状の把手をつけた土器もある（大同江面西墳・文献25）。褐釉・緑釉などの施釉軟陶の副葬も埴室墓になって始まるようである。施釉軟陶を副葬する墓は限られるが、一つの墓に副葬される施釉軟陶の数は少なくなく、特定の墓に集中する傾向を示す（石巖里266号墓・梅原考古資料，貞柏里69号墓・図・文献44）。

灰色系土器では、罐のほか、竈の模型や耳杯、皿などの食器形の土器も現れ、豆も副葬された例（南井里53号・文献5・梅原考古資料）がある。竈の明器に付属する甌には、円孔を穿った甌A（石巖里99号墓・文献26）とヘラ先を斜めに差し込んだ甌B（石巖洞古墳・図・文献25）がある。

楽浪土城址出土の土器（下）

鳥形ないし鉤形の鈕をつけた土器の蓋はしばしば見られる。滑石混入土器は変化が乏しく、典型花盆形土器（南井里53号墓）と変形花盆形土器（石巖里99号墓・図）が残る。白色土器の大甕の口縁はA、Bともあり、胴部はやや縦長になる傾向がある。また大甕のほか、口縁部を複雑に加工したり、肩部に耳をつけたりした中型の罐も現れる（南井里53号墓）。

石巖洞古墳（図）は内行花紋鏡と硬化した盤龍鏡を副葬しており、魏晋のころの墓と思われる。中型の罐、竈の明器とこれに伴う小型土器3点、白色土器大甕2点がある。灰色の小型土器の底部は静止糸切りで、側面下部は回転を利用しないヘラ削りである¹²⁾。竈に伴う明器の甑の孔はヘラ先を斜めに差し込んで穿ったもので、甑Bにあたる。

年代が確実な4世紀の墓に、大同江の北の平壤駅構内で発見された、「永和九年（353年）」銘の磚と石材で築かれた佟利墓がある。墓室からは内外にロクロの痕跡を残した灰色堅緻な壺の口縁破片が出土している（文献13）が、小片のため詳しいことはわからない。

このように、平壤周辺では、楽浪郡設置直前の墓には土器が副葬されず、楽浪郡滅亡後の副葬土器については詳しいことがわからない。楽浪郡時代の副葬土器は、墓の構造の変化とともに変化しており、墓の年代から副葬土器の年代を限定することができる。これによって副葬土器と共通する土城の土器の年代が求められる。

② 智塔里土城の土器との比較

現在までに確認された楽浪郡のころの集落遺跡で、楽浪土城の土器の分析に参考となるのは黄海北道載寧郡の智塔里土城である。

智塔里土城（唐土城、古唐城）は楽浪土城の南60kmの黄海北道載寧郡智塔里にある。戦前から楽浪郡時代の土城として知られており、付近に「使君帯方太守張撫夷塼」などの銘をもつ塼で築かれた墓があることから、後2世紀初頭ごろに楽浪郡の南半を分離して設置された帯方郡の郡治である帯方県城とする説もある（文献6、24）。

1957年に科学院考古学民俗学研究所によって、この土城内外の1箇所ずつで発掘が行われ、両発掘区の上層で楽浪郡時代と思われる遺構と遺物が発見された。報告書（文献36）から判断する限り、発掘された土器は楽浪土城の土器に近い。灰色系、滑石混入、白色の3種の胎土が認められ、器形もほとんどが共通する。しかし智塔里土城の報告書に筒杯、豆、鼎などに関する言及はない。一方、楽浪土城には少ない橋状把手が、智塔里土城では図版で確認できるだけでも3点もあること、櫛描紋を施した罐もあることなどから、智塔里土城には平壤の塼室墓副葬土器に対応する土器が楽浪土城よりも多いように思われる。

智塔里土城の周囲には、塼室墓は多いが、同穴合葬木槨墓は報告されていないこと、黄海南・北道一帯には3世紀から4世紀の中国王朝の年号を記した塼が多数発見されている（文献4、14）ことから、智塔里土城の遺物は楽浪土城の遺物よりも相対的に下る可能性が考えられる¹³⁾。以上の土器の違いが年代の差によるものとするれば、豆、筒杯、鼎などは楽浪郡時代の土器としては比較的古

い時期の土器であった可能性が考えられる。

③ 日本出土の楽浪系土器

楽浪郡地域から搬出されたと思われる土器が、対馬・杵岐・福岡県糸島郡などで発見されていることは、すでに触れた。いずれも灰色系土器で、従来漢式土器などと呼ばれてきた。

福岡県糸島郡前原町の三雲遺跡番上Ⅱ-5地区で発見された土器溜状遺構では、弥生時代前期から古墳時代初期までの土器が間層をはさまずに順次堆積していた(文献33)。調査区の土層は5層にわかれ、第5層は弥生前期後半、第4層は中期、第3層は後期を主体とする“純土器層”であった。この第3層と第4層から筒杯、鉢、平底の盆、盆類口縁、罐口縁、器台の脚裾部と思われる土器片などの「漢式土器」が数十点出土している。「純土器層からの出土で出土状態がきちっと層位的にとりあげられる状態ではなかった」というが、筒杯(図3)、平底の盆の破片(報文、図138-14)、盆類口縁(報文、図139-20)は「中期後半からやや下ったころ、直口の鉢(報文、図139-16)、罐口縁(図23-1,2)は「後期前半を前後するころ」、口縁端が外反する薄手の鉢(図8-2~4)は後期後半と報告されている。

三雲出土の「漢式土器」の平底の土器は、底面に静止糸切り痕、側面下端に回転を利用しないヘラ削り痕を残すものがほとんどである。罐は、頸部内外面に縄蓆紋の痕跡があり、肩部外面には横方向の細かい条線状の叩き目が残っていることから、図20, 21のような縄蓆紋罐と思われる¹⁴⁾。

平壤および北九州の出土の漢式鏡を媒介にすれば、「中期後半からやや下った時期」は異体字銘鏡によって併穴合葬木槨墓から中央間仕切り型同穴合葬木槨墓の時期に、「後期前半を前後するころ」は方格規矩四神鏡によって中央間仕切り型から同一内槨型の早い時期、「後期後半」は内行花紋鏡などによって同一内槨型の遅い時期から埴室墓の時期に対比される。

おなじ糸島郡の志摩町御床松原遺跡では、「弥生時代中期後半から終末までの土器でとりわけ中期後半~後期前半までの土器は夥しい量である」包含層から「漢式土器」が3点出土した。盆の胴部破片2点と罐の肩部破片(図23-3)のようである(文献3)。

対馬の三津島町小式崎1号石棺出土の鉢と、楽浪土城B”Ⅲ区出土の鉢はほぼ同型式である。小式崎の石棺の年代は、共伴遺物から弥生時代終末・古墳時代初頭とされることから(文献16)、出土の鉢はおおむね3世紀、埴室墓の時期の土器と考えられる。

④ 楽浪土城出土土器の年代と変遷

以上の関係する資料の検討結果から、楽浪土城の土器の変遷は次のように考えられる。

無文土器を除くと、土城内でもっとも古くさかのぼる可能性がある土器は、灰色系土器の縄蓆紋小型罐と滑石混入土器の典型花盆形土器(図20-1; 27-6)である。この2種の土器は、前1世紀の単葬木槨墓に副葬されている。しかしこの2種の土器は併穴合葬木槨墓にも副葬されるもので、楽浪土城の小型罐と花盆形土器が単葬木槨墓の時期にさかのぼるものかどうかかわからない。

楽浪土城址出土の土器（下）

無紋の小型罐は、副葬土器では併穴合葬および中央間仕切り型木槨墓にほぼ限定されることから、紀元前後の土器と思われる。肩部以下に縄蓆紋のある中型罐，変形花盆形土器，白色土器の確認できる上限もこの時期である。三雲遺跡での出土例から筒杯，平底の盆などの年代の一端もこのころにあることが確認される。

同一内槨型木槨墓（1～2世紀）の副葬土器に対応する楽浪土城の土器ははっきりしない。平底の小型罐（図25-3）が石巖里9号墓の小型罐と，筒杯の1点（図1-7）に施された細かいヘラナデが石巖里205号墓の罐のヘラナデと共通すると思われる程度である。三雲遺跡出土例から直口の鉢，縄蓆紋の中・大型の罐の年代の一端がこのころと考えられる。智塔里土城と楽浪土城との比較からすれば，筒杯・豆・鼎の多くは木槨墓の時期であった可能性がある。

埴室墓（2世紀末～3世紀）の副葬土器と土城の土器とのあいだには，共通する土器をいくつか見出すことができる。櫛描状の紋様をつけた罐（図27-5）と，器蓋の一部と思われる鳥形の土器片（図22-11）がまず挙げられる。口縁が外反する薄手の小型鉢（図7-6）は対馬の出土例と石巖里252号墓の土器（梅原考古資料）から埴室墓の時期であることが確認される。橋状の把手（図27-4）もこの時期かもしれない。南井里53号墓の豆は土城の豆とはやや器形が異なり，対応するものかどうか疑問が残る。

このように土城出土土器には，併穴合葬木槨墓から埴室墓の副葬土器に対比される土器が存在することが確認される。しかしそれ以前および以後の土器の有無は，年代が確かな対比資料がないため確認できない。

このような結果は，「楽浪土城の年代は中央間仕切り型木槨墓から埴室墓の時期で，実年代では後1～3世紀」とする北朝鮮の研究者の見解に近い（文献37,42）。しかし土城には紀元前の遺物はないという主張¹⁵⁾に対する判断は保留せざるをえない。

(3) 楽浪土器の器種と製作技法

次に前節の結果を踏まえて，あらためて楽浪土器の器形，用途，製作技法を胎土別にまとめることにする。

① 灰色系土器

胎土はきめ細かく，砂はほとんど含まない。色調は灰色，黒灰色など灰色系統のものが多く中には灰褐色，褐色，赤褐色などを呈するものもある。断面の色調は，表層と中心部が異なるものが多い。一般にやや軟質で，朝鮮三国時代の陶質土器や日本の須恵器ほど硬質のものはわずかである。

ほとんどが無紋か成形痕である打捺痕を残しているだけで，装飾としては櫛描紋と貼り付け凸帯紋がある程度である。内面には格子目に沈線を引いたものがある。また焼成後に文字を刻んだものもある。

器種と用途

灰色系土器は器種が豊富である。土城からは筒杯，豆，灯，小型鉢，鉢，皿，盆，有脚土器，甗，有孔土器，盆類，小型・中型・大型の罐，大甕などが出土し，墓からは小型・中型罐，各種の明器が出土している。

筒杯，豆は比較的早い時期のもので，おおむね木槨墓の時期である可能性がある。鉢には口縁が真っ直ぐなもの，口縁が外反する薄手のものがあり，後者は埴室墓の時期に下る可能性がある。甗A，Bの年代の一端はともに埴室墓の時期にある。罐は縄蓆紋丸底から無紋平底へ変化した。盆には縄蓆紋の鍋底のものと平底無紋のものがある。大型の盆には鍋底のものが多かったように思われる。盆の底部の形態は罐ほど単純な前後関係にはないようで，小型罐が丸底であった段階で，平底の鉢はすでに現れていたものと思われる。

大甕，各種の罐，大型の盆類は貯蔵用，盆類，甗は調理用，鉢類，小型盆などは食器であろう。小型・中型の盆は煮炊きや加工に用いられたことも考えられる。豆は食器，祭祀などの用途が考えられる。筒杯は，後述のように，調理場と思われる遺構付近からは出土せず，むしろ豆，鉢などの食器に近い分布を示すことから，食器の一種ないし食卓用の調味料入れ¹⁶⁾などの用途が考えられる。有孔土器は調理場と思われる遺構付近から出土しており（後述），酒の濾過などに用いられたものかと想像する。二次的な利用と考えられるが，大型の盆・罐・甕には棺として埋葬に用いられたものもある（文献35, 44）。

製作技法

灰色系土器の成形の基本は粘土紐積み上げである。中型・大型の土器は，粘土紐を積み上げ，叩き技法で成形し，回転を利用して仕上げている。筒杯，小型鉢，小型罐など小型の土器では叩きを加えず，回転を利用して一気に成整形したとみられるものもある。また豆の脚部の成形には，布を被せた型に粘土を押しつけて成形する一種の型起こし技法も行われた。

a. 叩きの痕跡

外面に叩き成形の痕跡である打捺紋が見られるものがある。外面の叩き目は縄蓆紋がほとんどで，叩き成形には主に縄を巻いた叩き板が用いられたことがわかる。一部には平行線状の紋様を刻んだ叩き板を併用したものもある（図17-1, 3; 26-9~11）。

土器内面の当て具痕のほとんどは，木の年輪と関係するものようである（図44）。4は彫りが深く，溝を彫り込んだ当て具の痕跡とも考えられるが，大多数は痕跡が浅く，年輪の柔らかい部分が減ったために生じた凹凸が写されたものようである。3はきわめて浅く一見したところ擦痕にも見えるが，子細に観察すると弧状の打捺痕が重なっていることが確認できる。1，4，5の弧に直交する直線は，芯裂け（年輪に直角の方向に生じた亀裂）の転写であろう¹⁷⁾。6，7は当て具に刻まれた紋様が転写されたとみられる数少ない資料である。6は玉を持ったカニのハサミのような紋様である¹⁸⁾。7は細く粗い格子目か「田」の字状の紋様が刻まれた当て具の一部が破損したものの転写のようである。8は細かい溝が入った円盤の周囲を押しつけたような痕跡である。また縄の圧痕

楽浪土城址出土の土器（下）

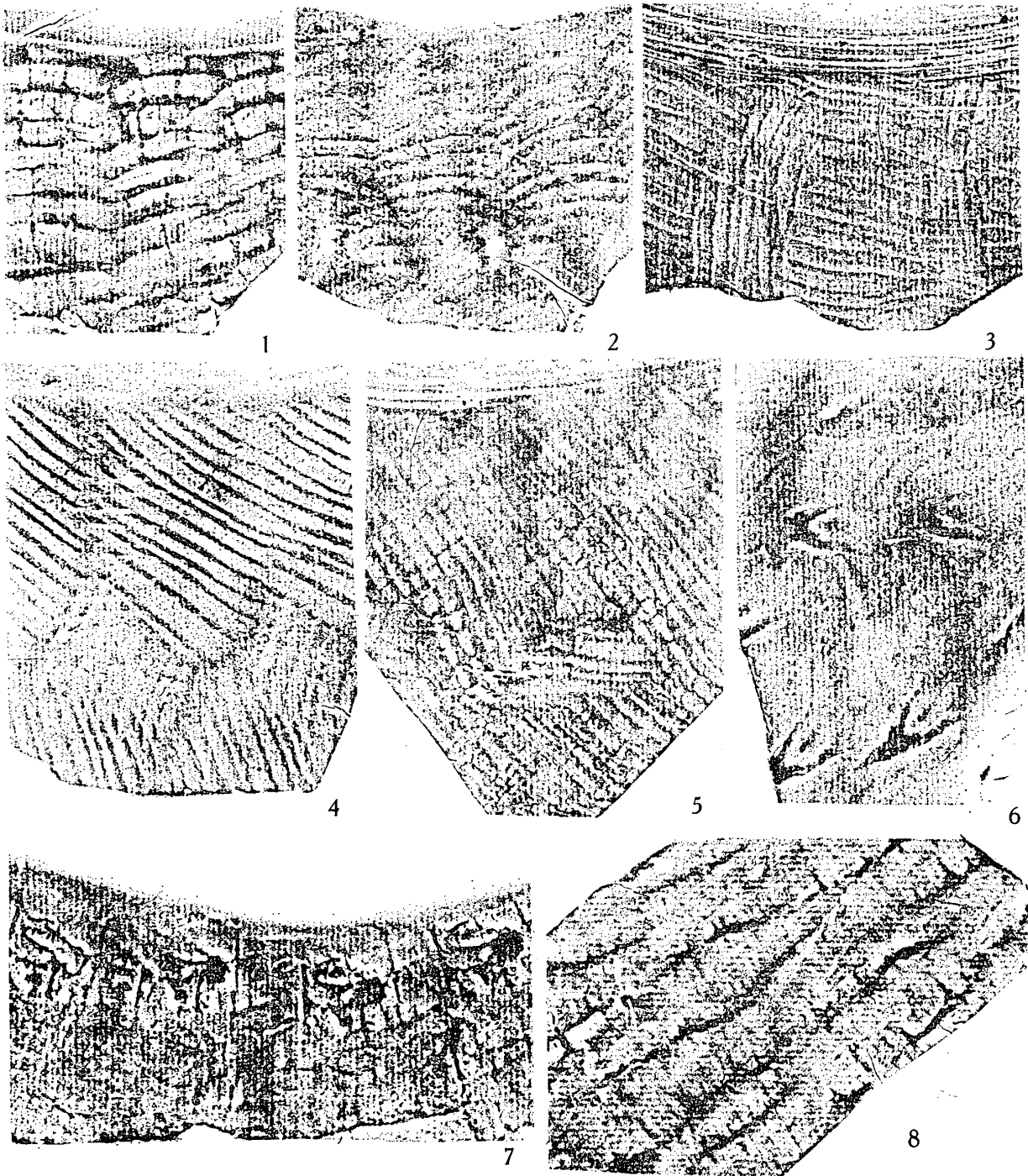


図45 楽浪土城 灰色系土器内面の当て具痕（4/5）

1：図20-8， 2：同10， 3：同14， 4：同15， 5：図21-2， 6：同1， 7：同7， 8：図26-11

もある（図20-12;21-8）ことから、縄を巻いた当て具も用いられたと思われる。格子目の叩き目と当て具痕を残す土器片（図32-1,2）は、時代または製作地に疑問が残る。

罐や盆などの外面の叩き目と横ナデ痕の境を観察すると、ナデ痕の上に縄蓆紋が打捺されている場合がほとんどである。このことは、土器上半部のナデ仕上げのあとに打捺が加えられたことを意

味する。盆類の胴部には上半部のナデ痕と下半部の縄蓆紋の境界の部分に、上から別の叩きに加えられたものがある。これらの点から、土器の上半部と下半部を別々に成形して接合する技法が存在したことも考えられる。

副葬土器にみる限り、楽浪郡時代には縄蓆紋は減少し、消滅する。単葬木槨墓、併穴合葬木槨墓の時期の小型・中型罐には、縄蓆紋がみられる。しかし西暦紀元前後以降から、罐は無紋化し、同一内槨型木槨墓・塚室墓の罐には縄蓆紋はみられない。同時に罐の胴部と底部の境が明瞭な稜をなすようになり、胴部下端にヘラ削り痕が見られるようになる。この変化は紀元前後ころ、それまでの罐の底部を叩いて仕上げる技法から、回転台上で底部以上を成整形し、糸で土器を台から切り離して完成品とする技法に変わっていったことを示している。胴部下端のヘラ削りは、切り離した後、底部の周囲の余分な粘土を削りとるために行ったもので、糸切りに伴う工程であろう。

b. 成整形における回転の利用

中型・大型の土器の場合、回転を利用したと思われる整った水平方向のナデ痕の下に叩き目がかすかに残っている場合が多く、まず叩きによって成形し、回転を利用してナデ調整したことが明らかである。

小型の土器の場合は、叩きを加えず、回転を利用して一気に成形したと見られるものもある。小型罐（図29-1, 2）の内底には、「の」字状の回転を利用した調整痕があるが、同様の痕跡は筒杯（図1-6; 2-2, 3）、鉢（図7-3, 6）、盤（図7-9）などでも明瞭である。調整痕の回転方向はみな「の」字と同じである。このことから、これらの比較的小型の器の成整形の際には、台が左回転したものと考えられる。粘土塊からロクロの遠心力を利用して直接器形を挽き出す技法が存在したかどうかは不明であるが、小型の土器には、粘土紐をロクロ上に積み上げ、固定して、水挽きしたものがあはることは間違いのないであろう。

器形が回転体であるのに、仕上げに回転を利用しない土器もある。楽浪土城の豆には全く回転を利用しないもの（豆A₁）があり、回転を利用したものでも杯部の仕上げにのみ回転を利用し、脚部の仕上げには回転を利用しない（豆A₂、B）。豆Bには脚部の底面に糸切り痕が残っているものがあることから、ロクロ上に粘土紐を積み上げて脚部とし、その上に杯部を載せ、ロクロを回転させて杯部を成整形したのち、脚部を糸切りし、回転を利用しないで脚部を仕上げたものと考えられる。豆A₂にも同様の方法で作ったものがあるかもしれないがはっきりしない。豆の仕上げの雑なことは楽浪土器としては異常であり、意図的に歪んだものを作ったかと疑われるものすらある。

c. 糸切り痕

土城出土土器のうち、平底の底面には糸切り痕がみられるものが多い。糸切り痕には、直線状のものと、曲線を描くものがある。

直線状の糸切り痕は、筒杯、小型鉢と鉢の一部に見られ、痕跡は粗い。静止状態の台の上に固定された土器の器底に糸を引っ掛けて、両手を同時に手前に引いて土器を台から切り離したものとされる。平行線状の整った痕跡がほとんどであるが、図47-1（図6-1）は例外で、両手を同時に動

楽浪土城址出土の土器（下）



図46 楽浪土城 灰色系土器底面の糸切り痕（1/2）

1：図6-1，2：図7-3，3：同9

かして大部分を切ったのち、左手を手前内側に一気に引いて、引き切ったものである。

擦痕が曲線を描くのは鉢の一部と盤に限られ、痕跡はより細かい。回転糸切りかともみまごうものもあるが、子細に観察すると静止糸切りであることがわかる。図46-2（図7-3）は擦痕の方向からみて、右手をやや手前に近寄せて両手で糸を同時に手前に引き、半ばに達した所で左手だけを引き、一旦止めてから引き切ったもののようである。図46-3（図7-9）は右手を固定し、左手だけを動かして引いたようである¹⁹⁾。

副葬土器では、管見による限り、石巖里205号墓（同一内槨型木槨墓）と石巖洞古墳、南井里120号墓（典型的埴室墓）の出土品が静止糸切りで、南井里116号墓（木室墓）の中型罐が回転糸切りである²⁰⁾。南井里116号墓と石巖洞古墳、南井里120号墓はすべて後漢後期またはそれ以降に下るとみられる。南井里116号墓の中型罐は、土城周辺の墓の副葬土器の罐の系統に属するもので、楽浪以外の土地からの搬入品とは考えにくい。平壤周辺では紀元前後以来おもに静止糸切りが行われ、楽浪郡時代の後期になって回転糸切りも行われるようになったが、必ずしも広く普及するにはいたらなかったのであろう。

なお比較的早い時期の土器と考えられる筒杯は、確認できる糸切り痕のすべてが直線状をなすことと、埴室墓の時期の鉢（図7-6）の糸切り痕は曲線をなすこと、石巖洞古墳（典型的埴室墓）出土土器の糸切り痕には両者が存在することから、糸切り痕が直線状になるものが先に現れ、曲線状になるものはあとになって現れたこと、両者がともに行われた時期もあったことが考えられる。

d. ヘラ削り

上述のように土城出土土器の胴部下端のヘラ削り痕は、糸切りに伴う調整痕と考えられる。大多

数は、短く不連続ないわゆる手持ち（静止）のヘラ削りである。底部外周に沿って、果物の皮を剥ぐように削るものと、垂直方向の短い削りを繰り返すものがある。石巖洞古墳や梅原考古資料などによって知られる埴室墓副葬土器にも、手持ちのヘラ削りが確認される例が多い。楽浪土城出土の罐の破片（図29-4）と器形不詳の胴部破片1点（図27-3）にはていねいな回転ヘラ削りがみられるが、他の土器とは焼成もやや異なり、楽浪製のものか問題が残る²¹⁾。

豆には脚のほぼ全面を粗くヘラ削りしたものがある。肉厚に作った脚部を、杯部との接合の後に削ったものようである。

② 滑石混入土器

やや粗い粘土に粗大な滑石の粒子を混ぜたもので、灰色、赤褐色、褐色などの色調を呈する。表層に細かい滑石ないし雲母の粉が集まっているため光沢をもつ土器もある。これは一種のスリップであった可能性もある。ほとんどが無紋で、装飾としては大型の土器に貼り付け凸帯がある程度である。

器種と用途

滑石混入土器の器種は、鼎、花盆形土器（典型、変形）、深鉢、甕、蓋などであり、墓から出土するのは花盆形土器だけである。鼎、花盆形土器などは滑石混入土器だけに見られる器種であり、甕には灰色系土器、白色系土の甕と器形が共通するものもある。

鼎は楽浪郡時代の比較的早い時期の土器であった可能性がある。

典型花盆形土器は前1世紀前葉から後1世紀ごろまでの墓からしばしば出土するが、埴室墓からの出土例もある。変形花盆形土器の初現は併穴合葬木槨墓の時期であり、内槨型木槨墓の後期から埴室墓の時期の墓から出土する。ともに墓での出土が多い割には、土城からの出土が少ないように思われる。

滑石混入土器は、内外面に吹きこぼれないしコゲの跡がみられることから、煮炊きに用いられたものが多かったことがうかがえる。滑石を混ぜたのは、耐火性を高めるためであろう。鼎が煮炊き用の容器であったことは容易に推測できるが、花盆形土器と中型の深鉢も、器形と胎土からみて、煮炊き用の深鍋もしくはそれに深い関係をもつ容器と思われる²²⁾。大甕は貯蔵用の容器であろう。大型の典型花盆形土器が甕棺に用いられた例もある（文献44）。

製作技法

楽浪の滑石混入土器の小型・中型土器の特徴は、土器内面に布目がついていることで、型に布を被せ、そこに粘土を貼り付けて成形する型起こし技法が行われたものとみられる。土器内面の所見から、土器の下半を型起こしで作り、これに内側から粘土紐を付け足し、（多くの場合回転を利用して）口縁部を調整したことがわかるものが多い。

土器内面の布目はふつうきわめて細かく、1 cm 四方あたりの縦糸・横糸の密度が50×50本に達するものも少なくない。また縦糸・横糸の比率がかなり大きいものもある。このことから土器の製

楽浪土城址出土の土器（下）

作にかなり高価な布が用いられた可能性が考えられる。

楽浪土城出土の瓦にも滑石混入胎土のものがあり、そうした瓦の内面にはやはり 1 cm 四方当たりの糸の数が50本前後の細かい布目がついていることが多い。楽浪土城では滑石を混ぜた胎土と布を被せた型を利用する成形技術が固く結びついていたことがうかがえる。

大型土器には布目は見られない。器形の類似する灰色系土器や白色土器同様、粘土紐を叩いて成形し、その後叩き目と当て具痕を磨り消したのであろう。アンペラ庄痕のある底部破片は、大型の土器の成整形がこうした敷き物の上で行われた事を示している。

③ 白色土器

胎土はやや粗く、時に白色の小礫を含む。色は白色で、一部にやや赤みがあったものもある。ほとんどが無紋で、一部に櫛描の施紋のあるものがある。

器種と用途

白色土器は土城出土品では大型の甕に限られる。副葬土器でもこれに中型の甕ないし罐が加わるに過ぎない。

白色土器は併穴合葬木槨墓から塚室墓にかけての墓に副葬された土器であるが、より古い時期から存在していた可能性もある。口縁の形態は2種に分けられるが、これは年代差を示すものではない。長期にわたって作られたが、器形の変化は少ない。

副葬土器の中型の甕から食物の痕跡が発見されることが多く、白色土器はもっぱら貯蔵に用いられたものとみられる。また甕棺に転用された例も報告されている（文献44）。

製作技法

楽浪土城出土の白色土器大甕の内外面はなでられて無紋となっているが、ナデ痕の下に縄蓆紋がかすかに残っているものがある。副葬土器には土器下半に縄蓆紋がはっきり残っているものもある。口縁部には粘土の継目が観察されるものがあり、灰色系土器と同様に粘土紐を積み上げ、これを叩いて成形し、粘土紐を継ぎ足し、回転を利用して口縁部を仕上げたものと見られる。

(4) 土城内の出土位置

最後に楽浪土城出土土器の出土地点をまとめておきたい。

遺物への注記によって、土城出土土器501個体分中、321点の出土地点がわかる（表1）。出土の土器片がすべて取り上げられたとは考えられず、注記のない土器も少なくないが、おおよその傾向を知ることは可能であろう。表の灰色系土器には非楽浪系と思われる土器も含んでいるが、数は限られており大勢には影響しない。

土器が最も多いのはD区域である。発掘面積が広いこともあるが、礎石列、板石を組み合わせた溝址などの遺構も多いことから、もともと土器が多く使用されていた場所であったことが考えられる。面積、遺構の密度ではD区域とほぼ同じG区域の出土土器が極めて少ない²³⁾。

表1 胎土別土器出土区画

灰色系土器はD区域で全体の40%が出土しているが、B・B'・B''トレンチ、Cトレンチ・C区・C-D区、E・E'トレンチなどでも一定の数量が出土している。これに対し、滑石混入土器はD区域で全体の67%が出土し、ほかの発掘区での出土は少ない。白色土器は点数が少なく、やや不確かではあるが、10点中7点がD区域で出土している。

トレンチ・区域	A	G ₁	B	G ₂	E	C	D	F	H	
灰色系土器 305	12	2	29	1	54	21	81	11		211
滑石混入土器 150	3	1		1	13	8	55	1		82
白色土器 21	2				1		7			10
その他の土器 16			2	2	4		7			15
施釉陶器 9			1				1	1		3
計 501	17	5	32	1	72	30	151	12	0	321

(BはB・B'・B''トレンチ、CはCトレンチ・C区域・C-D区域、DはDトレンチ、D区域、EはE・E'トレンチ、G₂はGXXV~XXXIII区とG区域の合計、G₁はGI~XXIV区をさす)

表2 主要器種出土区画(トレンチ・区域は表1に同じ)

次に各器種の出土地点を改めてまとめる。

表2では、食器かと思われる器種、主に調理加工に用いられたと思われる器種、貯蔵用の器種に分けてみた。特定の発掘区に集中する器種と、散漫な分布を示す器種がある。出土状況が不明とはいえ、特定の発掘区に顕著な集中をみせる場合にはなんらかの意味があると考えてよいであろう。

トレンチ・区域	A	G ₁	B	G ₂	E	C	D	F	H	
筒杯				1	1	1	13	2		18
豆		1	2		21	1	8	4		36
小型鉢・鉢・盤		1	4		2	1	3	1		12
有脚土器			1			2	1	2		6
甗A			3		1		3	1		15
甗B					4	1	2			
有孔土器					1		5			6
鼎		1		1	2	4	22	1		31
盆類口縁	7		7		5	4	9			32
罐	2		6		9	7	13			49
大甕 (灰色)					1		2			3
(滑石)							7			8
(白色)							7			10

特定の発掘区に集中する器種としては、灰色系土器の筒杯、豆、有孔土器、滑石混入土器の鼎、灰色系・滑石混入・白色の大甕が挙げられる。このうち、豆がE・E'トレンチから多数出土するほかは、D区域に集中している。

比較的散漫な分布を示すのは、小型鉢、鉢、皿、有脚土器、盆類口縁、罐などである。もっともこれらの多くは破片を一括した分類で、複数の器種を含んでいるため分布にはあまり意味はない可能性が高い。

各発掘区ごとに出土土器は以下の通りである。文献27の遺構の説明に合わせ、西の発掘区から始める(巻末の「楽浪土城土器出土地点一覧」も参照)。

Aトレンチは土城の中央台地の南に位置し、他の発掘区からはやや離れている。遺構は発掘されず、土器はすべて包含層からの出土である。Aトレンチの土器は多くはないが、他の発掘区とはや

楽浪土城址出土の土器（下）

や違った土器が目につく。食器的な土器は無い。灰色系土器12点の内、7点は盆類の口縁であり、口径は他の発掘区の盆類よりもやや小さめである。肩部に櫛描紋を施した罐の破片はAⅨ区で出土した。滑石混入3点中2点は典型花盆形土器の口縁（AⅣ・Ⅹ区）であり、他はない薄手の白色土器の破片もある。

Gトレンチ西半（G₁）のⅠ～ⅩⅣ区出土とわかる土器は少ない。GⅣ・Ⅴ区の塼築遺構は、使用された塼および胴張りの平面形から、典型的塼室墓との関連が考えられる。ここでは無文土器も出土しており、遺物が遺構と関係するとは限らないようである。ただ盤は、糸切り痕が楽浪郡時代では比較的新しい時期のものである可能性もあることから、遺構と近い時期の土器である可能性もあろう。

Bトレンチでは、耕土下10cmのところにおびただしい瓦塼破片が見られたという。灰色系土器12点、施釉陶器1点がある。灰色系土器には盆、大型罐、盤などがある。

塼敷遺構が発見されたB'トレンチおよびB''トレンチ南部の土器はない。

B''トレンチの土器は19点ある（灰色系17点、無文土器2点）。

建物址が発掘されたB''Ⅲ・Ⅳ区からは灰色系土器の甑Aが2点、小型鉢が出土した。この建築址の中では「瓦塼を積み重ねた炕の遺址らしいもの」と煤のついた青銅製の鼎が発見されている。出土の小型鉢は塼室墓の時期のものと思われ、遺構の塼と年代が合う。この建物址は塼室墓の時期の、調理に関係する建物であった可能性が高い。

B''トレンチ北半には溝址があり、豆A、小型鉢、鉢、盆類口縁などが出土している。土器は塼室墓の時期よりも早いものが多いようである。

G区域（G₂）出土と確認されるのは2点で、筒杯と鼎の脚各1点である。G区域の遺構の多くは、遺構の高さからB''Ⅲ・Ⅳ区の建築址よりも古いことが推定され、塼も使用されていないことが注意される（文献27）。これらの点は、筒杯や鼎は楽浪郡時代では比較的最早い時期の土器とする筆者の予想と矛盾しない。

E・E'トレンチの出土土器には豆、甑、中型罐が多い。中型罐は肩部以下に縄蓆紋をつけたものが多く、年代の一端が紀元前後に求められ、豆も比較的最早い時期の器種であった可能性がある。特に遺構は見出されなかったというから、この一帯は比較的最早い時期の土器が捨てられた場所であった可能性が考えられる。

Cトレンチ・C区域西部では建物の礎石が発掘された。この周辺ではCⅠ区で甑B破片、CⅢ区で有脚土器、CⅣ区で小型罐4点が出土している。CⅧ区周辺では盆、小型罐、鼎の脚などが出土し、C区域西部の敷石遺構付近では、有脚土器、小型罐、大型罐などが出土している。CⅩⅢ区でも土器がまとまって出土している。C—D区域では完形の鼎が出土した。このようにC区域一帯では、罐（特に小型罐）と鼎の出土が目立つ。

D区域の土器の分布には一定の傾向が認められる。

D区域南のD²⁻³Ⅱ～Ⅲの4箇所が発掘区には調理・食品加工に関係すると思われる鼎、甑、盆類、

有孔土器、貯蔵用と思われる大甕（灰色系、滑石混入、白色とも）が集中する。ここには調査者が炕ではないかと推定した石組の第1溝址がある。そして筒杯、豆、罐はこの一帯の北に分布する。

このような状況から、第1溝址一帯には、ある時期に厨房のような施設があった可能性が考えられる。鼎は楽浪郡時代でも比較的古い器種の可能性があること、D区域一帯で出土した埴は無紋の方形埴で、埴室墓と共通する埴は用いられていないことから、D区域の遺構はG区域の遺構同様B”トレンチの建築址よりも早い時期であったことが考えられる。

G区域とD区域では、石築の遺構が多く、埴室墓の埴は用いられていないこと、G区域出土の鼎、筒杯はD区域からも多数出土した器種であることなどの共通点がある。G区域の遺構とD区域の遺構はほぼ同時期であった可能性が考えられる。

図45はC・D区域の主な土器の出土発掘区を示したものである。土器が出土した発掘区しかわからないのでおよその位置しか示せないが、第1溝址一帯とその周辺では、器種がかなり明瞭に区別されることは認められる。

F区域は建物の基礎が発掘され、かつ後漢鏡の破片が集中して発掘されたことで注目される。D区域の北に隣接するが、土器の出土は少ない。筒杯、豆、鉢など小型の食器類と有脚土器、灯と思われる土器などが出土している。筒杯、豆、鉢などが出土している点は、D区域北半の状況に近い。後漢のころ、性格の類似した施設が存在したのかもしれない。

埴敷遺構が発掘されたHトレンチの土器がないのは、B・B’トレンチの状況と一致する。

推測に推測を重ねた感はぬぐえないが、楽浪土城の土器と遺構の年代と性格についてある程度の見通しをつけることができた。現在の資料からも、さまざまな傾向を見出すことができるのであるから、改めて組織的発掘を行えば多くの事実が明らかになるものと信じる。

従来日本の考古学界では「漢式土器」という用語が、漢代の灰陶ないしその影響を受けた土器の意味で用いられており、楽浪の土器も「漢式土器」と呼ばれることがある。中国考古学の発展により、漢代の土器の地方差が明らかになりつつある現在、漢の土器ないしその影響を受けた土器を

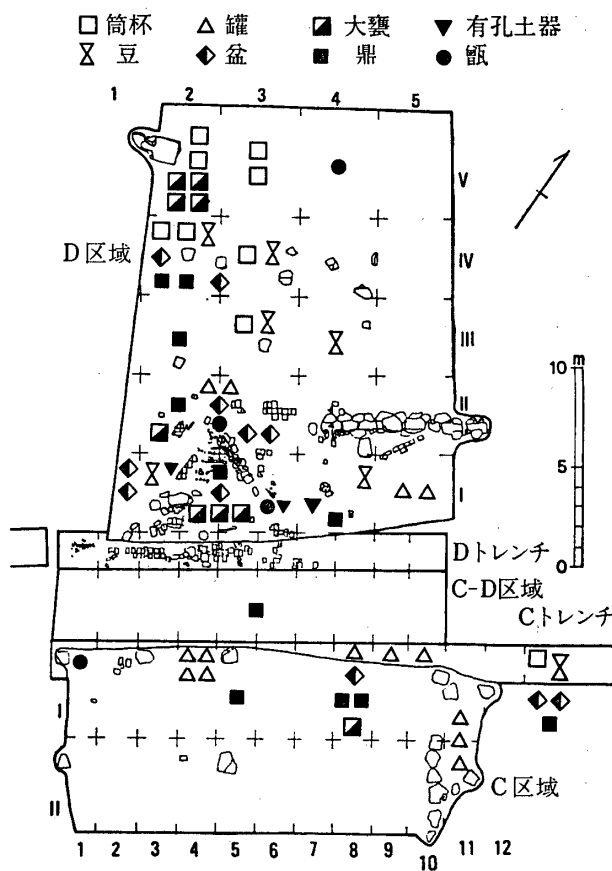


図47 楽浪土城 D区域周辺の主な土器の出土位置

楽浪土城址出土の土器（下）

「漢式土器」と呼ぶのは、漠然としすぎてあまり意味がないように思われる。今後は「漢式土器」の名称は学史的用語とし、各地域の土器によりふさわしい名称を与えることを提案する。各地域の土器の実態を把握することは容易なことではないが、東アジア諸地域の考古学の状況からすれば不可能ではないであろう。少なくとも本稿によって楽浪郡時代の平壤周辺の土器の実態はかなり明確にしえたと考える。

（土器の項終わり，1986年6月8日）

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、以下の方々の御教示、御指導、御協力を賜りました。記して感謝します。（敬称略）

小田富士雄，後藤直，早乙女雅博，鈴木昭夫（写真指導），関野雄，竹末純一，田村晃一，千葉基次，中山清隆，中村春寿（故人），西田泰民，藤井和夫，柳田康雄，申敬澈，土器洗いを手伝って下さった考古学研究室の後輩諸氏

註

- 1) 前稿執筆以後，土器分類を一部変更した。そのため軟質灰色系土器に分類しなおした土器を追加する。発掘の状況，土器の出土地点などについては（文献27）を参照されたい。なお本稿では拙稿「楽浪土城址出土の土器（上）」（文献29）と「同（中）」（文献30）掲載の図を引用する場合は特に文献を示さない。図1～5は（上），図6～27は（中）に掲載されている。
- 2) 発掘の報告によればCⅣ区付近は火災に遭っているという。またC区域出土の土器には，これらのほかにも灰色系土器とすべき，赤褐色の土器片がある。
- 3) 発掘者の駒井和愛氏は「その外底に焼痕を存し，実用に供したことを明示していた」と述べている（文献20）。
- 4) 朝鮮半島の楽浪郡の滅亡を後313年とする『資治通鑑』の記載には疑問も出されている（文献23）が，ここではいちおう通説にしたがっておく。
- 5) 雲城里土城では1962年に部分的な発掘が行われ，土器は滑石混入土器の花盆形土器や灰色系土器，無文土器（明沙里型土器）など十数点が出土した（文献42），所羅里土城（文献1，24，38），於乙洞土城（文献26），黄海南道信川郡の青山里土城（文献2，9，18）の土器に関しては，踏査者の報告から楽浪土城の土器に似た土器の存在が推定されるにすぎない。
- 6) 個々の文献は挙げないが，総括的に言及したものとしては，文献6，26，42，43などがある。
- 7) 洛陽の鏡の編年が楽浪でも有効なことは，田村晃一氏によって示されている（文献31）
- 8) 黄海南・北道の北半では3世紀半ば以後，紀年埴を用いた墓が多数造られた（文献4，14，18）。平壤周辺で佟利墓以外に紀年埴を用いた墓がないことは，3世紀後半には平壤周辺の埴室墓の造営が下火になっていたことを示すものと思われる。
- 9) 報文には「草葉紋鏡」とあるが，掲載の図版は星雲鏡で，岡村秀典氏の分類の星雲鏡Ⅱ式に当たる（文献7）。
- 10) 王汗墓の木槨は，中村春寿氏ら（文献15）と同様に，別の形式とするのがより妥当と考えるが，本稿では木槨の細分にはあまり立ち入らない。
- 11) 本研究室所蔵品の所見による。

- 12) 東京大学総合資料館所蔵品の所見による。
- 13) 北朝鮮の研究者は、智塔里土城の周囲の墳墓はおもに塼室墓であり、内槨型木槨墓はないことから、智塔里土城が築かれたのは塼室墓の時期と考えている(文献42,43)。また智塔里遺跡の報告書は、智塔里土城の下限が楽浪郡滅亡以降に下がる可能性を否定していない。
- 14) 九州歴史資料館に保管されている資料の所見である。
- 15) 李淳鎮氏らは、楽浪「土城では土壙墓時代の遺物は1点もみつからなかった」と述べている(文献37)。ここでいう土壙墓には、当時の李氏らの分類による木槨土壙墓(本稿の単葬木槨墓)が含まれるので、李氏らは土城内には前1世紀末以前の遺物は無いと考えているものと解した。
- 16) 田村晃一氏の案。
- 17) 以上の観察には横山浩一氏の論文(文献34)によるところが大きい。
- 18) 前稿(文献30)執筆時には、凸点をもつ菱形の打捺痕の半分が隣接する打捺によって消されたものと考えていたが、誤認であった。
- 19) 以上の観察には小川貴司氏の論文(文献8)によるところが大きい。蛇足を加えれば、図46-3は氏が「技術的に不合理であり、また管見においてもこのような考古資料はない」とする実験例(同、図1-3)ときわめてよく似ている。
- 20) 南井里120号墓例は梅原考古資料中の梅原氏の土器所見記録からの推定である。他は本稿7(2)で触れた。
- 21) 申敬澈氏は石巖里99号墓出土土器は回転ヘラ削りされていると主張している(文献22)。氏の判断が正しいとすれば、回転ヘラ削りも楽浪郡時代の後期にある程度行われていたことになるが、報文(文献26)の写真による限り、問題の土器が回転ヘラ削りであるかどうか筆者には判別できない。
- 22) 花盆形土器が土城でも使用された実用の容器であったのか、主に副葬用とされたのかという点は、さらに検討する必要がある。
- 23) 土器以外の遺物でもG区域出土と確認されるものはきわめて少ない。遺構の状況からみて、遺物がほとんど出土しなかったとは考えにくく、なんらかの事情でG区域の出土遺物のごく一部しか本研究室に運びこまれなかったものと想像する。なおG区域は高橋勇氏の担当で、早稲田大学所蔵の駒井和愛氏の野帳にはG区域関係のメモはない。

楽浪土城土器出土地点一覧

カッコ内は本稿の挿図番号

灰：灰色系土器 滑：滑石混入土器 白：白色土器
 他：その他の土器 無：無文土器 釉：施釉陶器、

Aトレンチ	灰；盆類口縁2(19-8,12)		
AⅣ区	灰；盆類口縁2(19-14,15)	滑；花盆形(36-2), 口縁(37-3)	白；胴部
AⅤ区	灰；盆類口縁(19-13), 罐胴部, 平底		
AⅧ区	白；胴部		
AⅩ区	灰；罐胴部(27-5), 罐？口縁		
AⅩ区	灰；盆類口縁(9-5；19-11), 平底	滑；花盆形(36-1)	
Bトレンチ			
BⅠ-Ⅲ区	灰；盆類口縁2(19-23), 罐胴部, 胴部		
BⅣ区	灰；盆類口縁(19-1)		
BⅤ区	灰；平底(25-4)		
BⅦ-Ⅹ区	灰；罐(22-2,5), 盤？2(22-6), 平底		
BⅧ区	灰；豆A(4-16)		

栞浪土城址出土の土器（下）

- B XⅦ区 釉；(43-13)
- B' トレンチ 灰；小型鉢(6-2)，有脚土器(15-3)，甑A(24-1)，罐(22-1) 無；橋状把手2(43-9)
- B" Ⅲ区 灰；小型鉢(6-5)，甑A2(11-1,2)
- B" N・Ⅶ区 灰；鉢(7-6)，平底
- B" Ⅶ・Ⅷ区 灰；盆類口縁(19-6)
- B" X区 灰；豆(5-1)，鉢(6-3)，盆類口縁3(17-1；19-3,21)，罐底部(25-8)，盆類胴部
- C トレンチ 灰；鉢(7-3)
- C I区 灰；甑B
- C Ⅲ区 灰；有脚土器(15-4)
- C Ⅳ区 灰；罐4(20-6；29-1,2,3)
- C Ⅷ区 灰；盆類2(9-7)，小型罐(20-2) 滑；鼎脚，底部(36-13)，大甕口縁，有孔蓋(40-8)
釉；胴部
- C K区 灰；罐胴部(26-4)
- C X区 灰；罐(20-9)，鍋底(24-7)
- C XⅢ区 灰；豆脚部，筒杯把手付(15-5)，盆類口縁2(17-3；19-10) 滑；鼎耳2
- C 区域
- C5 滑；鼎
- C¹¹ I—Ⅱ区 灰；有脚土器，小型罐(20-4)，罐2(20-3,6)
- C—D 区域 滑；鼎(33-1)
- D 区域 灰；筒杯5(1-2,2；2-2,4)，豆A，豆B2(5-9,13)，小型鉢，鉢(6-4)，甑A，有孔土器2(12-11,14)，盆(9-3)，盆類口縁2(19-17,20)，罐3(20-1,5；21-5)，罐胴部5(26-2,3,7,8)，甕2(20-10)，橋状把手(27-4)，平底7(24-1,2,5；32-2)，鍋底2(29-4)，胴部(32-1)
滑；鼎口縁(33-3)，鼎耳2，鼎脚13(34-3,10,12,16,17)，花盆形，甕2(39-2)，把手4，口縁4(38-2)
白；甕 他；小型碗(42-1)，脚？(43-6) 釉；口縁
- D¹ I区 灰；盆類口縁2(17-2；19-19) 滑；口縁(37-8)
- D¹⁻³ I区 灰；盆類口縁 滑；鼎(37-13)，底部(36-15)，口縁(36-10)，大甕口縁2(37-18) 白；甕
- D² I区 灰；豆(5-4)，有孔土器(12-10)，球形土器(15-6)
- D² Ⅱ区 滑；鼎(34-15)，大甕口縁
- D² Ⅲ区 滑；鼎耳，把手(40-7)
- D² Ⅳ区 灰；筒杯2(2-8)，豆A(4-15)，有脚土器，盆(9-7)，平底3(25-4)
滑；鼎2(33-4；34-4)，底部(36-11)，把手(40-6)，蓋(40-11)，胴部
- D² V区 灰；筒杯2(1-7；2-1)，突起(28-3)，有脚土器 白；大甕口縁3(41-1)，大罐胴部2(41-11)
- D²⁻³ Ⅱ区 灰；小型罐胴部(27-6)，甑B2(12-6)，圜台土器(15-7)，盆類口縁(19-16)，甕胴部(26-5)
滑；鼎脚(34-9)，平底(39-12)
- D²⁻³ Ⅳ区 灰；盆類口縁(17-4)，突起(28-2)
- D²⁻³ V区 滑；口縁(37-10)
- D³ I区 灰；甑A，有孔土器(12-9)
- 炕(D³ I—Ⅱ区) 灰；盆類口縁(19-7)，盆類胴部(27-1)，平底2
- D³ Ⅲ区 灰；筒杯(2-5)，豆A(4-11)
- D³ Ⅳ区 灰；筒杯(2-10)，豆B(5-8) 滑；蓋(40-13)，有孔蓋(40-9)
- D³ V区 灰；筒杯2(1-3,4)，小型鉢(6-1) 滑；蓋(40-12)
- D³⁻⁵ I区 灰；球形土器(15-9)，平底(25-1) 滑；鼎，口縁2(37-2)，胴部2(39-8；40-2)
無；平底(43-10)

- D⁴I区 灰；豆脚，有孔土器(4-7) 滑；圈台土器(40-1) 無；角形把手2
 D⁴II区 無；角形把手
 D⁴III区 灰；豆B
 D⁴IV区 無；(43-7)
 D⁴V区 灰；甗A
 D⁵I区 灰；罐2(20-4,7)
 Eトレンチ 灰；罐口縁，平底3(25-2)，盆類胴部(26-6) 滑；口縁7(37-5,9,12) 他；罐口縁(43-2)
 E III区 無；角形把手(43-4)
 E V区 灰；甗A(12-4)
 E VI区 灰；罐(20-11)
 E VII区 灰；豆脚，鉢(6-6)，圈台土器(15-8)
 E' トレンチ 灰；筒杯，豆A3(4-12,16)，豆B7(5-15)，豆脚2(5-3,5)，鉢(7-8)，盆(9-4)，甗B3(12-3)，
 有孔土器B(12-12)，球形土器(15-10)，盆類口縁2(19-5,9)，罐7(20-4,12,10,13,15；21-
 3,4)，罐胴部(26-10)，甗(20-8)，平底2(24-3)
 滑；花盆形(36-3)，口縁2(36-5；37-4)，底部(36-12) 白；大甗(41-6)
 他；口縁(43-1)，把手？
 E' III区 灰；豆A(4-9)
 E' V区 灰；豆A(4-14)，甗B(12-2)
 E' VII区 灰；豆A(4-1)
 E' XII区 灰；豆A(4-2)，豆B(5-7)，盆2(9-1,2) 滑；鼎脚(34-13)
 E' XIV区 灰；豆B2(5-14,15)
 E' XVIII区 灰；豆A(4-10)
 F区域 灰；豆A2(4-7,8)
 F₁ 灰；有脚土器(15-1)
 F₂III区 灰；豆A(4-3)
 F₂V区 灰；鉢(7-1)
 F₃ 灰；豆A(4-4)
 F₄ 灰；筒杯2(1-6,8)，灯？(5-6)，有脚土器(15-2) 滑；鼎脚(34-6)
 F₅ 灰；甗B
 Gトレンチ
 埴築遺構(GV・V区) 灰；盤(6-9) 他；小杯(43-3) 無；平底(43-11)
 GXVI区 滑；鼎
 GXXIV区 灰；豆A(5-2)
 G区域
 G北 灰；筒杯(1-9)
 G南 滑；鼎脚？(34-14)

挿図出典

図35 1.文献41, 217頁, 図118-4 2.文献50, 564頁, 図2-29

図44 本文中に引用の文献の挿図・写真から筆者作成

文 献 (本号掲載分のみ)

〔日本文〕

楽浪土城址出土の土器（下）

1. 池内宏 1923「感興方面に於ける漢時代並高句麗時代の遺跡」『朝鮮』第95号, 49～71頁, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）
2. 池内宏 1941「楽浪郡考」『満鮮地理歴史研究報告』第16, 東京帝国大学文学部（再録：同1951『満鮮史研究 上世編』, 19～65頁, まさき会祖国社, 京都）
3. 井上裕弘編 1983『御床松原遺跡』（志摩町文化財調査報告第3集）, 志摩町教育委員会, 福岡県
4. 梅原末治 1933「朝鮮北部出土紀年博集録」『支那学』第7巻第1号, 121～128頁
5. 梅原末治 1936「南井里第五十三号墳」『古墳調査概報 楽浪古墳 昭和十年度』, 朝鮮古蹟研究会, 京城（ソウル）
6. 梅原末治・藤田亮策 1958『朝鮮古文化総鑑 第二巻』, 養徳社, 丹波（天理）
7. 岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号, 1～42頁, 京都
8. 小川貴司 1979「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号, 21～41頁
9. 小田省吾 1935『帯方郡及び其の遺蹟』, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）
10. 小場恒吉 1935「貞柏里第十九号墳」『古墳調査概報 楽浪古墳 昭和九年度』, 朝鮮古蹟研究会, 京城（ソウル）
11. 小場恒吉ほか 1935『楽浪王光墓』（古蹟調査報告第二）, 朝鮮古蹟研究会, 京城（ソウル）
12. 小場恒吉ほか 1974『楽浪漢墓 第一冊 大正十三年度発掘調査報告』, 楽浪漢墓刊行会, 奈良
13. 榎本亀次郎・野守健 1933「永和九年在銘塚出土古墳調査報告」『昭和七年度古蹟調査報告 第一冊』, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）
14. 榎本亀次郎・野守健 1933「楽浪帯方郡時代紀年銘塚集録」『昭和七年度古蹟調査報告 第一冊』, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）
15. 榎本杜人・中村春寿 1975『楽浪漢墓 第二冊 石巖里第二一九号墓発掘調査報告』, 楽浪漢墓刊行会, 奈良
16. 九州大学文学部考古学研究室 1975『対馬；浅茅湾とその周辺の考古学調査』（長崎県文化財調査報告書 第17集）, 長崎県教育委員会
17. 小泉顕夫ほか 1934『楽浪彩篋塚』（古蹟調査報告第一）, 朝鮮古蹟研究会, 京城（ソウル）
18. 小嶋健二 1937「道内支那領時代の遺蹟」, 黄海道教育会『黄海道地方誌』551～592頁, 帝国地方行政学会朝鮮本部, 京城（ソウル）
19. 後藤直 1982「朝鮮の青銅器と土器・石器」, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』（上下2冊）, 上冊243～296頁, 福岡
20. 駒井和愛 1965『楽浪郡治址』（考古学研究第三冊）, 東京大学文学部考古学研究室
21. 座右宝刊行会 1979『世界陶磁全集 17 韓国古代』, 小学館
22. 申敬澈 1983「伽耶地域における4世紀代の陶質土器と墓制：金海礼安里遺跡の発掘例を中心として」『古代を考える』34, 20～58頁, 古代を考える会, 大阪
23. 末松保和 1933「日韓関係」『岩波講座 日本歴史 第一巻』
24. 関野貞 1932『朝鮮美術史』, 朝鮮史学会, 京城（ソウル）（再録；同 1941『朝鮮の建築と芸術』1～266頁, 岩波書店）
25. 関野貞ほか 1915『朝鮮古蹟図譜 一』, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）, （参考資料：同 1915『朝鮮古蹟図譜解説 一・二』, 朝鮮総督府）
26. 関野貞ほか 1927『楽浪郡時代の遺蹟』（古蹟調査特別報告第4冊, 「本文」「図版上下」計3冊）, 朝鮮総督府, 京城（ソウル）
27. 谷豊信 1983「楽浪土城の発掘とその遺構：楽浪土城研究その1」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号, 129～155頁
28. 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号, 70～97頁
29. 谷豊信 1984「楽浪土城址出土の土器（上）：楽浪土城研究その2」『東京大学文学部考古学研究室紀要』

第3号, 41~58頁

30. 谷豊信 1985「楽浪土城址出土の土器(中): 楽浪土城研究その3」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号, 159~187頁
31. 田村晃一 1985「弥生文化と朝鮮半島: その交流のあり方をめぐって」, 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会『日本史の黎明: 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』527~551頁, 六興出版
32. 原田淑人・田沢金吾編 1930『楽浪: 五官掾王旰の墳墓』, 東京帝国大学文学部
33. 柳田康雄・小池史哲編 1982『三雲遺跡Ⅲ: 糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査』(福岡県文化財調査報告書第63集), 福岡県教育委員会
34. 横山浩一 1981「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化研究所紀要』第26号, 1~22頁, 九州大学文学部九州文化研究施設

[朝鮮文]

35. 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学・民俗学研究所 1959『台城里古墳群発掘報告』(遺跡発掘報告第5集), 科学院出版社, 平壤
36. 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学・民俗学研究所 1961『智塔里原始遺跡発掘報告』(遺跡発掘報告第8集), 科学院出版社, 平壤
37. 李淳鎮・チャン=ジュヒョップ 1973『古朝鮮問題研究』, 社会科学出版社, 平壤(金圭亨ほか部分訳 1976「馬韓の文化」『朝鮮学術通報』12巻2号~13巻1号, 朝鮮人科学者協会, 東京)
38. 朴晋煜 1974「咸鏡南道一帯の古代遺跡調査報告」『考古学資料集』第4集, 165~182頁, 社会科学出版社, 平壤
39. 李淳鎮 1974「夫租蔵君墓発掘報告」『考古学資料集』第4集, 183~191頁, 社会科学出版社, 平壤
40. キム=チョンヒョク 1974「土城洞第4号墓発掘報告」『考古学資料集』第4集, 192~199頁, 社会科学出版社, 平壤
41. 李淳鎮 1974「雲城里遺跡発掘報告」『考古学資料集』第4集, 200~227頁, 社会科学出版社, 平壤
42. 社会科学院考古学研究所 1977『古朝鮮問題研究論文集』, 社会科学出版社, 平壤
43. 社会科学院考古学研究所 1977『朝鮮考古学概要』, 科学・百科事典出版社, 平壤
44. 社会科学院考古学研究所田野工作隊 1978『考古学資料集』第5集, 科学・百科事典出版社, 平壤
45. 社会科学院考古学研究所 1983「楽浪区域一帯の古墳発掘報告」『考古学資料集』第6集, 3~167頁, 科学・百科事典出版社, 平壤
46. 申敬澈 1980「熊川文化紀元前上限説再考」『釜山史学』第4輯, 211~265頁, 釜山(後藤直訳1981「熊川文化紀元前上限説再考」『古文化談叢』第8集, 165~203頁, 北九州)

[中国文](発行地はすべて北京)

47. 天津市文物組・天津市歴史博物館聯合発掘組 1957「天津東郊発現戦国墓簡報」『文物』3期, 66~69頁
48. 天津市文化局考古発掘隊 1965「天津南郊巨葛庄戦国遺址和墓葬」『考古』1期, 13~20頁
49. 天津市文化局考古発掘隊 1965「渤海湾西岸古文化遺址調査」『考古』2期, 62~69頁
50. 河北省文化局文物工作隊 1965「燕下都第22号遺址発掘報告」『考古』11期, 562~570頁

Pottery from the Site of the Lelang Provincial Office in
Pyongyang, North Korea, the Eastern Outpost of the Chinese
Empire from the First Century B. C. to the Fourth Century A. D.

(I-III) : Summary

TANI Toyonodu

Lelang Province (楽浪郡) was one of local administrative organs of the Chinese Empire in northern Korea, which existed there from the middle of the Western Han dynasty (108 B.C.) to the end of the Western Jin dynasty (A.D. 313). The site of the provincial office is in a suburb of present-day Pyongyang city.

I have been examining the archaeological finds from the provincial office which were excavated by HARADA Yoshito and KOMAI Kazuchika in 1935 and 1937 (Tani 1983), and which are preserved in the University of Tokyo.

In this paper, I describe the pottery vessels and shards and examine their dates, forms, making techniques, and location in the site.

I. Physical Property of the Pottery

501 specimens are classified into six groups according to physical properties.

1. gray pottery (soft)	297
2. gray pottery (hard)	8
3. talcum pottery	150
4. white coarse pottery	21
5. other non-glazed pottery	16
6. glazed stoneware	9

II, III. Gray Pottery (soft/hard) (Figs. 1, 2, 4-7, 9-12, 15, 17-22, 23-27; Pls. 1-15:1-9)

Gray pottery was made from levigated clay. The color of the vessels is gray, but it varies from whitish to blackish.

Gray pottery includes *tongbei* 筒杯 cylindrical cups (Figs. 1, 2; Pls. 1, 2), *dou* 豆 footed bowls (Figs. 3, 4; Pls. 3-6), small *bo* 鉢 bowls (Figs. 6, 7; Pls. 7:1-6; 8:1), small *pen* 盆 jars (Figs. 9, 10; Pls. 10:1), steamers (Figs. 11, 12; Pl. 12:2, 3), large *pen* 盆 jars (Figs. 20-22; Pls. 10:1-5), *guan* 罐 vases (Figs. 20-22, 29; Pls. 10:6; 11; 12: 13:1), large *weng* 甕 jars (Figs. 22, 30, 31; Pls. 13:2), and others.

IV. Talcum Pottery (Figs. 33, 34, 36-40; Pls. 15:12-14; 16; 17; 18:1-2)

This is brown or gray coarse pottery with a considerable amount of talcum particles. It contains cooking pots like *ding* 鼎 tripods (Figs. 33, 34; Pl. 15:12-14; 16:1-4), flowerpot-style jars (Fig. 36; Pl. 16:5-7), medium size jars (Fig. 37, 38; Pl. 17:1-4), and large jars (Fig. 39; Pl. 17:5-7).

V. White Coarse Pottery (Fig. 41; Pl. 15:10, 11)

White coarse pottery is restricted to large *weng* 甕 jars.

VI. Other Non-Glazed Pottery (Figs. 42, 43:1-11; Pl. 18:5-7, 9, 10)

VII. Glazed Stoneware (Fig. 43:12-15; Pl. 18:8)

VIII. Discussion

1. Dates of the Pottery

Within these groups, gray pottery (both soft and hard, except those in Figs. 19:22; 20:11; 29:4; 32:1, 2; Pls. 11:1 lower right; 5:6, 7), talcum pottery, and white coarse pottery are considered to be from the Lelang era. I call them the Lelang pottery. The dates of "other non-glazed pottery" is unknown. Glazed stoneware belongs to later periods.

2. Chronology of the Lelang Pottery from the Office Site

It is difficult to establish comprehensive chronology of the pottery from the office site. It is possible to date some of the pottery vessels from the office site by comparing the pottery from the Han tombs in Pyongyang (fig. 44) with the Lelang pottery found in northern Korea and Japan.

It is not known whether there is any pottery of the first century B. C. in the office site. The possibly earliest pottery contains small *guan* vases with cord-mark impressions (Fig. 20:1; 27:6) and flowerpot-style jars (Fig. 36-1:4). Compared with the funeral pottery in the Lelang tombs, these vessels could date back to any point in time from the first century B.C. to the first century A. D.

It is certain that the dates of the many vessels in the office site are between the first and the third century A.D. Small *guan* vases with smooth surfaces (Fig. 29:1-3; Pl. 15:2, 3), medium and large *guan* vases with cord-mark impressions (Figs. 20:8, 10, 12-15; Pls. 11:3; 12; 13:1), *tongbei* cylindrical jars, *dou* footed bowls, and *ding* tripods are estimated to be of the first and second century. Small thin *bo* bowls (Fig. 7:6; Pls. 8:1), bird style nipple on pottery lid (Fig. 22:11; Pls. 13:4) are dated to be of the third century.

3. Characteristics of Lelang Pottery

(1) Gray Pottery

Gray pottery contains tableware, cookware (except cooking pots) and storage vessels.

Major forming techniques of gray pottery were coiling and beating.

Cord-mark impressions on the surface shows that cordwrapped beaters were used. Most of the anvil markings on the interior contain traces of natural annual rings of wooden anvils (Fig. 45:1-5). There are only two kinds of markings by incised anvils (Fig. 45:6-7). On the interior of one shard were anvil markings made by the edge of a wooden disc (Fig. 45-8).

After it was formed, the whole vessel or a part of it was smoothed on a potter's wheel. Some small vessels were directly smoothed on wheels from clay coil without beating. It is probable that some of the small vessels were thrown from a clay ball.

The vessels with flat bases were thrown or smoothed on wheels and were cut by passing strings along the top of the wheelheads. The cut-off marks on the flat bases show that wheels were stationary when the bases were cut (Fig. 47).

According to the funeral pottery in Pyongyang, the vases before the Christian era had round cord-marked bases, and those after the Christian era had flat and plain bases.

This change shows that the techniques of smoothing or throwing on wheels and cutting by strings became more popular in Lelang around the Christian era.

(2) Talcum Pottery

Talcum pottery contains cooking pots like *ding* tripods, flowerpot style jars and medium size jars, and large storage vessels like *weng* jars. Talcum particles were probably added mainly in order to improve refractoriness.

On the interior of the small and midium size vessels, impressions of cloths are often found. This fact shows that the jars were formed on convex molds wrapped by cloths.

(3) White Coarse Pottery

White coarse pottery is restricted to large storage vessels.

Faint traces on the surface show that the vessels of this type were formed by coiling and beating, and were smoothed on wheels.

3. Location of Pottery in the Site

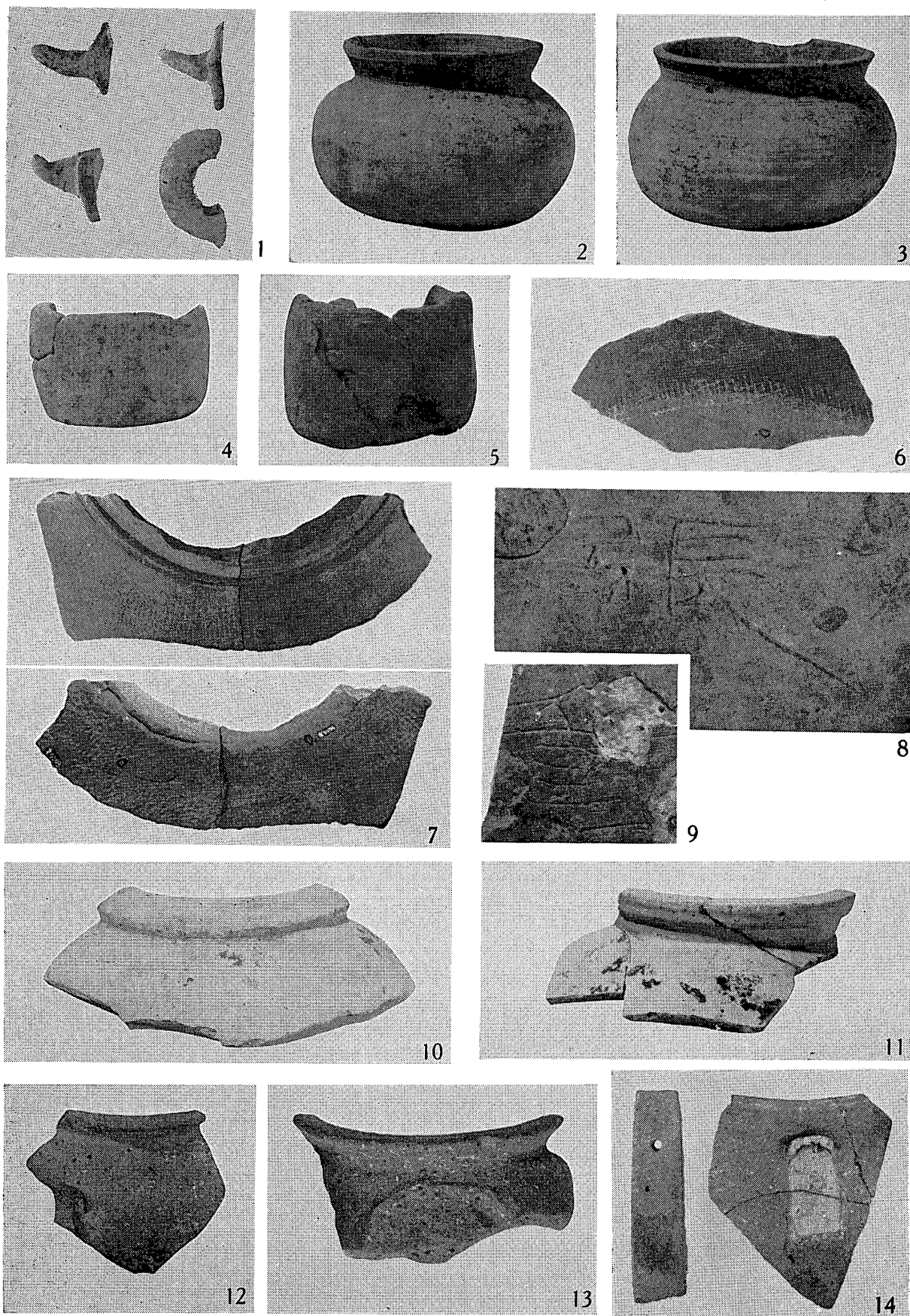
The location of the excavated pottery in the office site shows the nature of the architectural remains.

It is probable that the area around ditch 1 in area D, which Komai estimated to be a floor heater, was the kitchen in the first and second century A.D., because *ding* tripods, steamers and large storage jars were found around the ditch. The brick house in trench B", where the bronze *ding* tripod was found, is assumed to be the kitchen in the third century, because the bricks of the house were of the same type as those of brick chamber

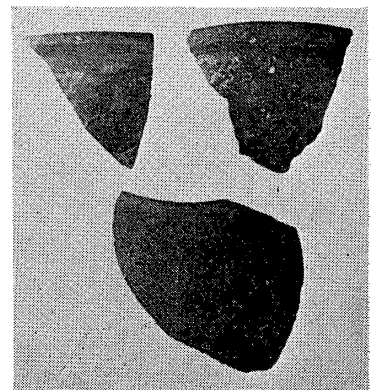
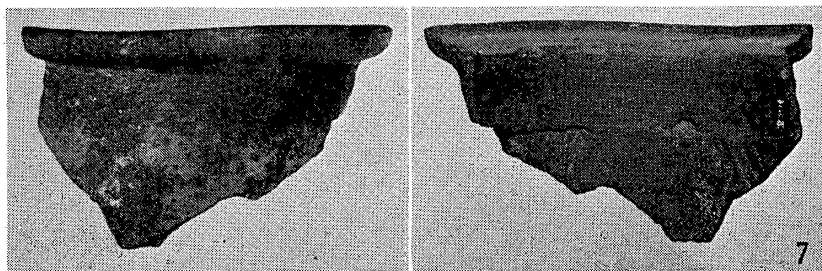
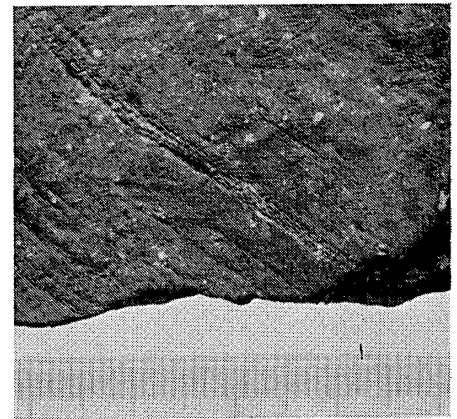
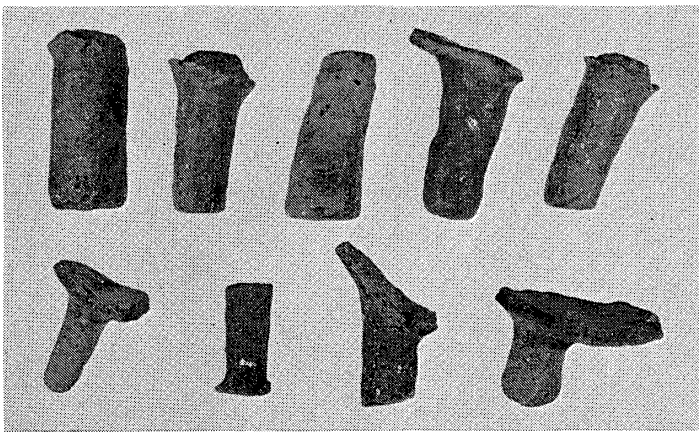
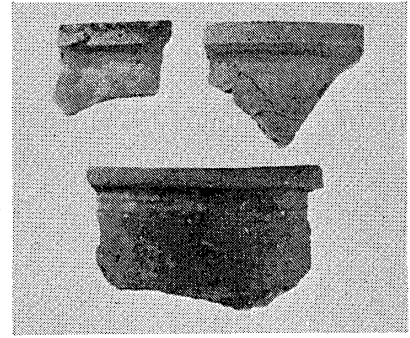
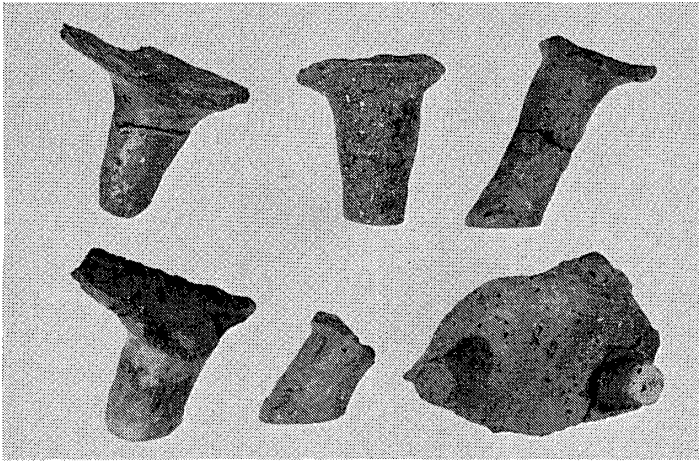
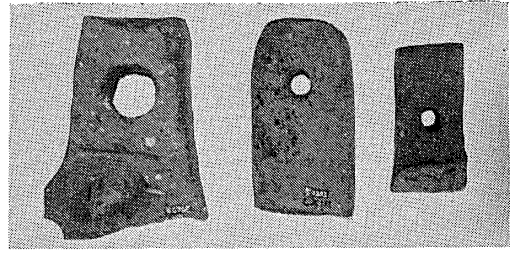
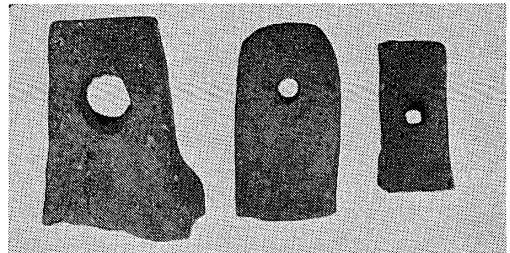
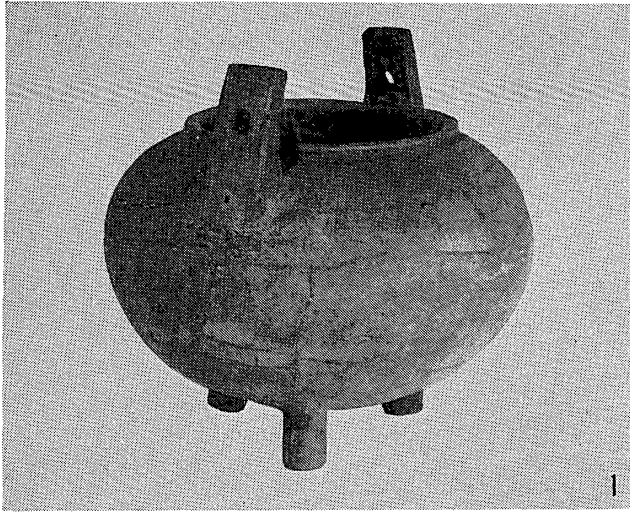
tombs (around the third century), and also because the small thin *bo* bowl of the third century and steamers were found there. The buildings in areas F and G are assumed to be contemporary with the kitchen in area D because of the dates of the excavated pottery vessels, and the fact that bricks of the brick chamber tombs were not used there.

Literature cited

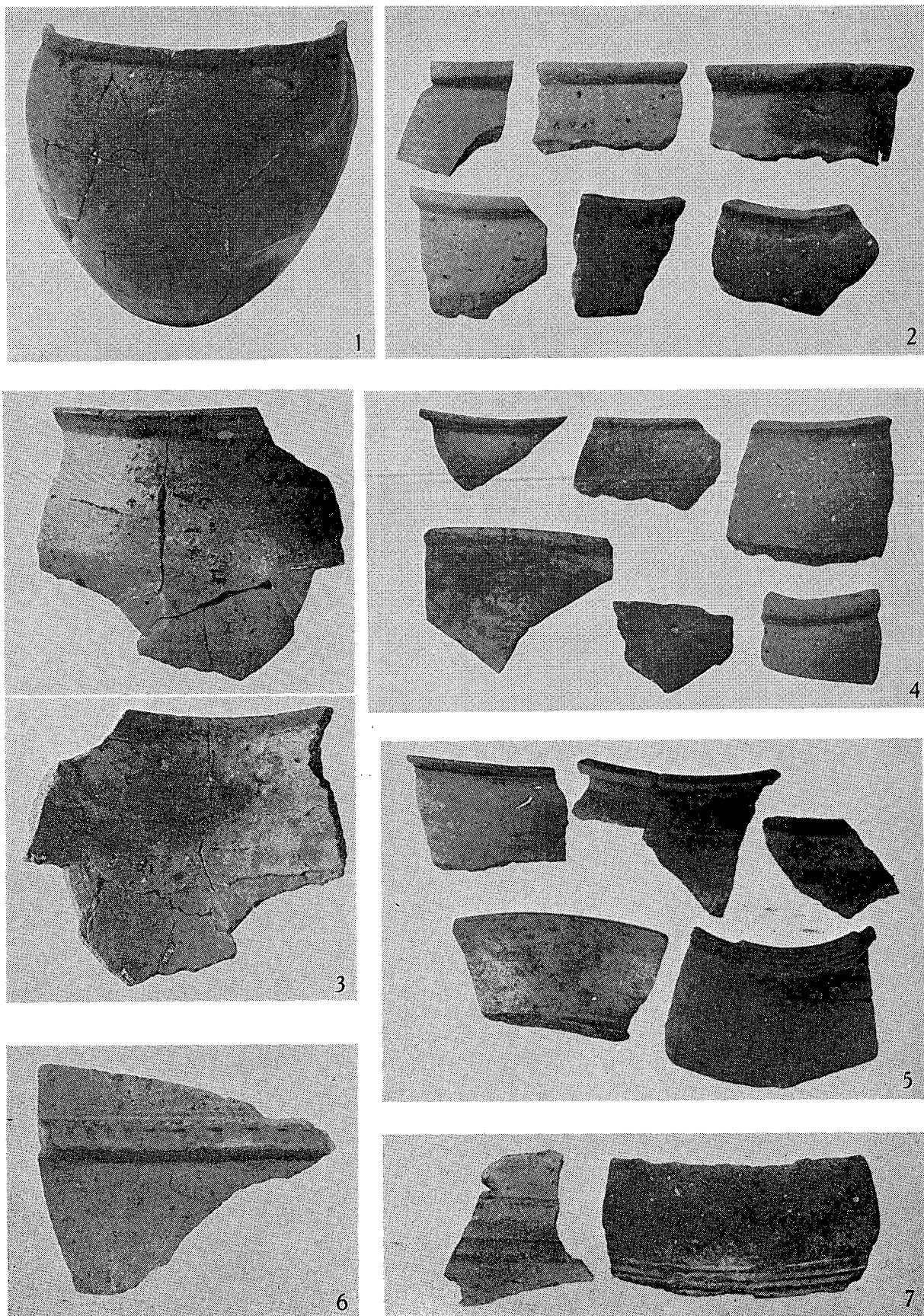
TANI Toyonobu 1983 Monument of Lelang Provincial Office, Pyongyang, North Korea. *Bulletin of the Department of Archaeology*, 1. University of Tokyo, p. 129-155



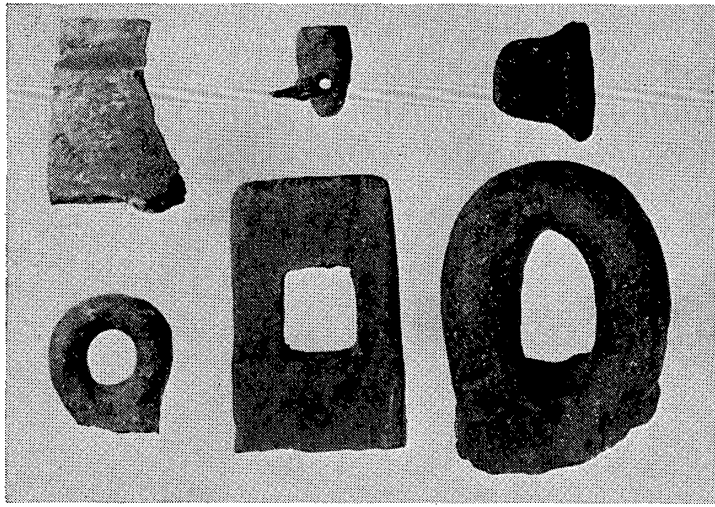
軟質灰色系土器・硬質灰色系土器・白色土器・滑石混入土器 その他



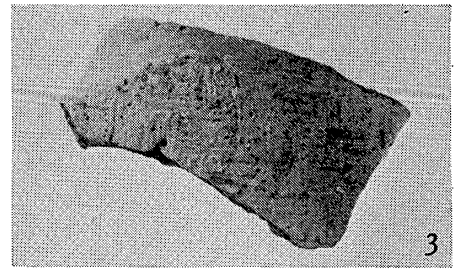
滑石混入土器 鼎・小型容器



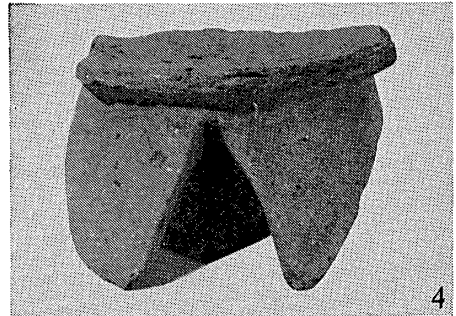
滑石混入土器，中型・大型容器



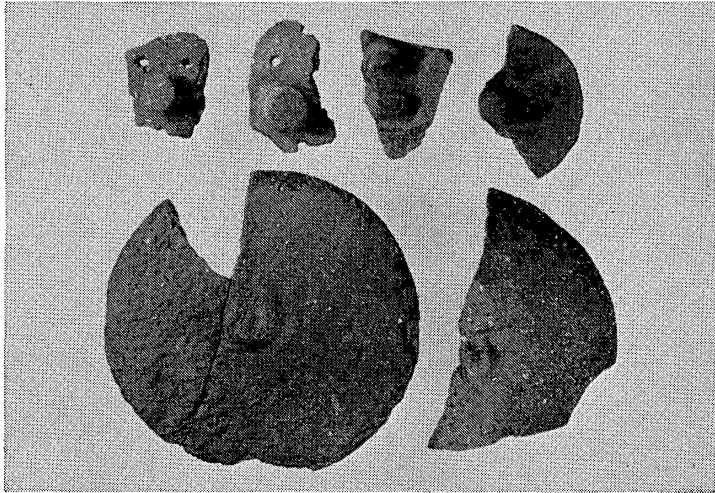
1



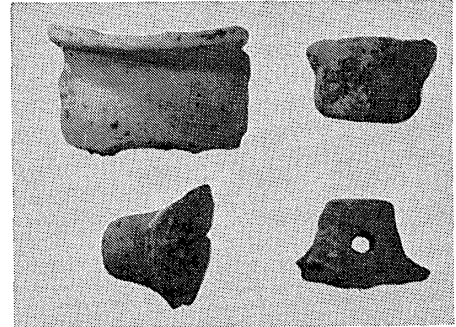
3



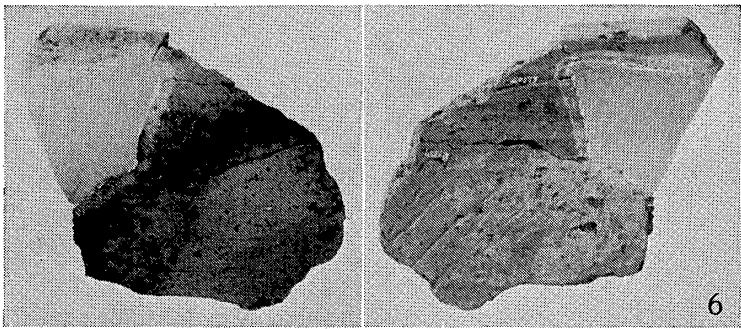
4



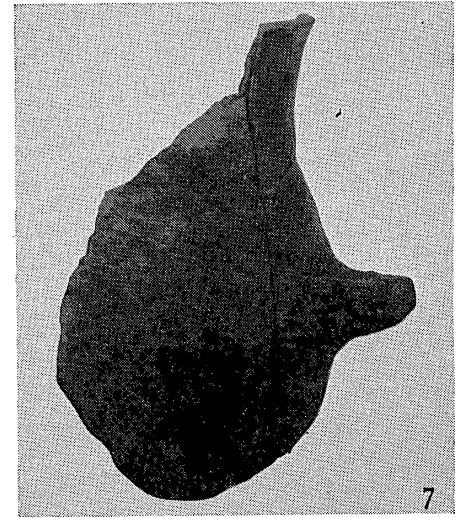
2



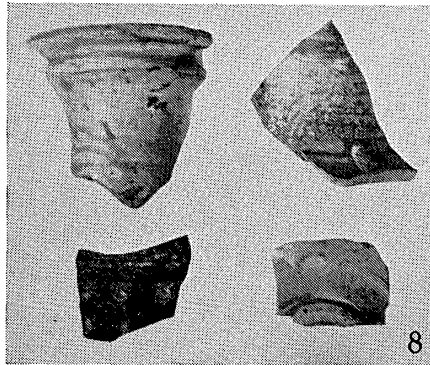
5



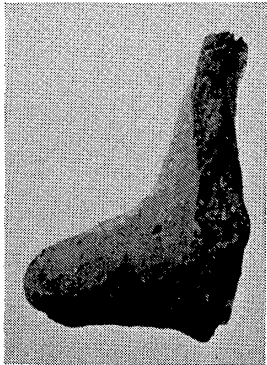
6



7



8



9



10

滑石混入土器, 無文土器, 施釉陶器, その他